

# 響 風

Hibiki Winds



あしや旬会

第1号

## はじめに

平成十六年五月、ふと思いついて節子さんに吟行の誘いの電話を入れたのが始まりだった。

七月には恒例の「夏行」の予定がはいっている。この年の「夏行」は信州の志賀高原。なんとしても行きたい。「夏行」は、メンバーと会う楽しい旅なのだが、常に時間内に俳句がつけられるだろうかという不安がつきまとう。少しでも吟行句会に慣れようと、大野城市に住む節子さんに「一緒に吟行して句を作らない？」と電話をする。意外にも快諾。話しがトントンと進んで、節子さん、光子さん、由紀子の三人句会が実現する。

当日、雨の芦屋海岸から響灘を見渡しながらの吟行句会は、三句出句の三句選句。六月には、節子さんの友人、聖子さんの参加で四人になり、十七年三月からは真理子さんも加わり、出句も三句では物足りないと言われ、七句、十句と増えていく。

この句会を『あしや句会』と名付け、俳句を中心におしゃべりをし、行きたい場所に行く。回を重ねることに言いたいことを言い合う雰囲気の中で「俳句会が楽しい」とそれぞれが思うようになる。俳句の奥は深く、まだまだ俳句を楽しむまでには至っていない。それでも吟行地を肌で感じ、一瞬の感動や発見が句になった時、机上での俳句とは違った充実感が残る。

一本の電話で始まった九州組の吟行句会。お互いにちょうどよいタイミングだったのだと思う。

吟行句会を楽しむうちに、楽しかった一日と吟行地の記録を残しておきたいと思い、吟行記を書き始める。文章を書くことには余り自信はないが、今では吟行記を書くことが自分自身の生活の刺激になっている。更に、仲間内で見るとホームページを平成十六年十一月から掲載し、半ば強制的に見てもらっている。気がつくとも一年が過ぎたので、これまでの一年分をまとめてみようと思いついた。

付き合っていて頂いている皆に感謝するとともに、パソコン知識の浅い私に代わって、ホームページ掲載を手伝っている家人に感謝する。

平成十八年二月

江本 由紀子

# 響風 第一号 目次

## ■はじめに

## ■吟行記

第一回	金山川・瀬板の森公園	1
第二回	高塔山・若松南海岸	3
第三回	二日市温泉 大丸別荘	6
第四回	宗像大社 初詣	9
第五回	大宰府天満宮	12
第六回	魚見公園・芦屋釜の里	15
第七回	大宰府「岩屋城址・都府楼跡」	18
第八回	若戸大橋周辺若松北海岸「千畳敷」	21
第九回	宮地嶽神社	24
第十回	博多祇園山笠	27
第十一回	関門海峡クルーズと門司港レトロの黄昏	32
第十二回	管崎宮「放生会（ほうじょうや）」	36
第十三回	皿倉山山頂	40
第十四回	油山市民の森 油山観音正覚寺	44
第十五回	天拝山・二日市温泉	48

## ■あとがき

# 吟 行 記

(第一回～第十五回)

# 第一回吟行記

平成十六年十月十四日(木)

参加者 節子 光子 聖子 由紀子

## 金山川・瀬板の森公園



今回はいつもより一時間早く十時ごろ折尾駅に集合し、吟行地金山川に車を走らせる。

お目当てのコスモスは真つ盛りとはいえないが、ピンクや白の花が川に沿って一キロほど続き、横の休耕田もコスモス畑となっている。金山川のこのあたりは「水辺の里」といわれ、菜の花、桜、チューリップ、カンナ、コスモスと四季折々の花が、ボランテアの人々によつて手入れされ、春は「チューリップ祭」、秋には「コスモス祭」が開催されている。

川に沿ってしばらく歩く。黄色のカンナがまだ咲き残っている。少し強めの風に揺れるコスモスの散歩道は四人を俳人にさせる。いつもの楽しい笑い声が自然に消え、自分の世界をノートに書きとめている。

川風にコスモスの色流れけり  
休耕田今コスモスの風に揺れ

由紀子  
光子



その後、車で三々四分の「瀬板の森」公園へと移動する。瀬板貯水池の周りを遊歩道にして、森林浴や四季折々の草花を楽しむことができる公園で、北九州の都市部にこんな広い自然に恵まれた公園があることに驚く。この貯水池は三菱化学の工業用水の水源らしいが、このように市民に開放してくれるのは有難い。

今日の散策コースは南口から入り、「もみじ谷」や「木の橋」を渡り、「水辺のテラス」を通って展望台まで。萩の径がつづくが、ここではすでに刈られている。所々に刈り残った萩が咲いている。遠くに皿倉山が見え、池の対岸にはゴルフ場がある。秋空に白い雲が流れ、広々とした緑と池が美しい。池の漣を見ていると噴水が勢いよくしぶきを上げる。休日になると親子連れで賑うこの公園も、平日の正午ごろは何組かの親子とウォーキングを楽しむ少人数の熟年のグループが行き交うのみである。俳句作りにはもってこいの環境である。

秋高し真綿裂くよに雲流れ  
さざなみの立つ池の端冬近し

聖子  
節子





今年に残暑と台風で紅葉が例年より遅れているが、水辺のハナミズキが美しく紅葉している。団栗が落ちている径を歩いていると、メタセコイヤに似た「ラクウショウ」別名「沼杉」が高々と空に向かって伸びている。この四人の中で一番草木の名前に詳しい節子さんが、目ざとく見つける。

ヌマスギの葉に透けて空秋となる 光子  
木の实降る空青かりし湖あおし 由紀子

幼稚園児くらいの男の子が、母親と網で池の魚を掬おうとしていて、「釣り禁止」の立て札が気になりましたが、子育て時代を思い出しながら、ままたごと遊びのような「お魚取り」をじっと見ている。子供の屈託のない声や笑顔が、静かな池に映る。

おしゃべりをただ聞いており薄紅葉 節子  
風音を集めて秋の沼深し 聖子

そろそろお昼になるので、来た径を戻る。銀杏の薄紅葉や桜紅葉、臭木の白いガクに濃い青色の実が美しい。時折鳥の音がする。鳴き声ですぐ名前がわかるといいのだけど・・・。

秋の森を十分歩いた後は、お楽しみランチ。今日は「梅の花」青葉台店をご指名。席待ちの人が何人かおり、私達も玄関正面の「お月見だんご」やスキの飾り、苔生した中庭を見ながら少し待つ。出された梅こぶ茶が美味しい。



ようやく名前を呼ばれ、広間の席に座る。「秋限定ランチ」を注文する。程よい疲れを覚えながら、次々に運ばれてくる料理に舌鼓をうつ。軽めによそわれた茸飯を3杯お替りする人もいて、楽しいランチタイム。すぐ近くの由紀子邸にて五句の句会をする。光子さんの仕事の時間がせまり、解散。

光子さんは、これから9時まで薬局の仕事。節子さん、聖子さんは博多経由で自宅まで。それぞれにごくろうさまです。楽しい一日をありがとう。

## 第二回吟行記

平成十六年十一月十八日(木)

参加者 節子 聖子 光子 由紀子

### 高塔山、若松南海岸

十一月十八日といえば、北九州では八幡製鉄所の「起業祭」の日。今は「まつり起業祭」といって、一企業主催のものではなく、日にちも変更されただけで、この頃からいつも急に寒くなる。この日も朝方パラパラと小雨が降り寒い。予定の皿倉山を変更して、高塔山と若松南海岸を吟行地とする。折尾駅十時十五分集合。

車で高塔山の頂上まで登る。若戸大橋の手前を左折し「白山神社」を横目に急坂をぐるぐると登っていく。山というほど高くなく、桜の名所でもあり、北九州市民であれば一度は行ったことがあるというほど市民に親しまれている。

桜の季節と「紫陽花祭り」のころは平日でも次々と車が登っていくが、今日は人がほとんどいない。頂上は公園になって

おり、お土産店が二〜三軒並んでいるが、閑散として店番の人も見えない。すぐ横の展望台からは北九州を一望することができ、晴れた日には関門橋までよく見える。

今日は晴れるでもなく雨がふるわけでもなく、冬霞というのだろうか、ひびき灘に広がる工業団地となっている



埋立地も、十基の大型風力発電機もかすかに形がわかるほどだ。灘からの風が容赦なく吹き上げてくる。眼下には洞海湾の工場群が広がり、煙が幾筋も立ち上っている。見慣れた風景だが、海、山に恵まれた地形は美しい。こうして町を見渡していると、世の中の憂きことを忘れ無心になれる。人は時々「高き」に登ることが必要なのでは・・・と思う。以前戸畑に住んでいた節子さんは、子供さんとよくここに遊びに来ていたそうで、懐かしい様子。しばらく「あれが皿倉山、権現山、こつちが小倉・・・」と皆で石板の地図をみる。

工場の煙眼下に冬ざるる

光子

冬雲に洞海湾の鈍き色

節子

展望台の上がり口には、高塔山のシンボルともいえる「河童封じの地藏尊」が奉られている。この地方に伝わる河童伝説由来の地藏尊の背中には今も大きな船釘が打たれている。そのすぐ横手には大きな桜の並木道。春には花見客で賑わうが、今は静かに冬芽をつけ、その時をまっている。「万葉植物園」や「県木の森」などがその下にひろがる。



小鳥来る河童封じの地藏尊

由紀子

絡みつくもの絡ませて枇杷の花

節子

体の冷えてきたところで、若松の市街地で昼食をとる。「赤提灯」という天婦羅や刺身のおいしい



お店で、若松では名の知れた魚庵「千疊敷」の姉妹店。お客が二階席に上がる度に大太鼓が轟く。背広姿のサラリーマンが次々と入ってくる。

大太鼓鳴らす料理屋温め酒 由紀子

体力の回復したところで、次の吟行地若松南海岸へと歩いていく。

若松は明治維新以降日本の近代化に伴い、一寒村から筑豊の石炭を積み出す重要な港として大きく変貌した町。中央資本、地方資本の進出で隆盛を極めた当時の様子は、地元の芥川賞作家火野葦平の「花と龍」を読むとよくわかる。この小説は葦平の両親がモデルとなっており、若松港の石炭沖仲仕のリーダー（玉井組の親方）だった父親とそれを助けた母親マンを描いた痛快無類な自伝的長編である。是非一読をお勧めする。



若戸大橋の上り口を中心に広がる市街地は当時の面影を残しており、アーケードのある商店街は少し寂れた様子はするものの、庶民の生活の匂いがする。

冬来たりさびれゆく街静かなり 聖子  
白猫の飛び出してきて石路の花 光子

数年前、明治大正期の貴重な建物を残しておこうという市民運動が起こり、今年8月海岸通りにある「旧古河鉱業若松ビル」の保存改修工事が完成する。渡船乗場からJR若松駅までの海岸通りに並ぶ「石炭会館」や「上野海運ビル」等はまだまだそのまま使われており、



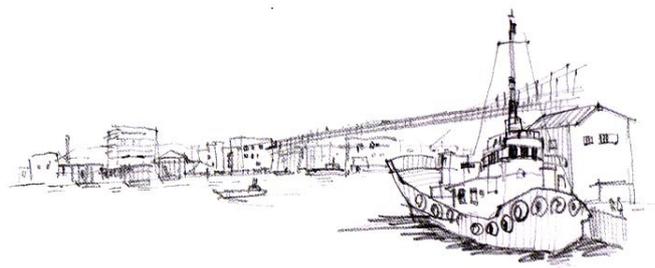
漆喰の木枠の窓や階段の造りなど当時のままである。また通りを挟んだ洞海湾側には石炭荷役の仲仕「ごんぞう」の詰め所である「ごんぞう小屋」が復元されており、錨型の柵や小奇麗なベンチも所々にならべられている。「門司レトロ」の規模ではないものの若戸大橋を借景に、明治大正の港町の雰囲気漂っている。

枯葉舞う大正ロマンストリート 由紀子  
冬の街広場のような交差点 節子  
石炭で栄えし港初時雨 光子  
冬風ぎの解微かに揺れており 聖子

「旧古河鉱業若松ビル」は九月から一般公開しているので中に入ってみる。大太りのおじさんが、受け付けに一人暇そうに座っている。煉瓦造二階建ての中は多目的ホールと大小の会議室になっており、いろいろな趣味の会に使われているらしい。内装は重厚で落ち着いた色調。二階のホールには丸いテーブルや椅子が並べられ、小さいキツチンも備えられている。ビロードのカーテンとシャンデリア。大きな花瓶に薔薇の花が飾られていれば言うことないほど贅沢な気分させられる。しばらく座って外を眺める。・・・汽笛が鳴り窓いっぱい大型のタクシーが横切る。・・・ここで句会をするのもいいかもしれない。ちなみに一室の使用料金が午前中は一八〇円、午後は三五〇円と格安である。

受付のおじさんに挨拶して帰ろうとすると、どつさり若松観光案内のパンフレットを渡される。久々に人間に会ったようなうれしそうな顔をするので、すんなり帰るのも悪いような気がする。

句会には海が見える海岸通りのサンリブの一階で行う。マックなどが入った広々とした椅子席の窓際を確保。先程のゆったりとしたレトロな気分は消え、なんとか五句出句する。今回の高塔山・若松南海岸の吟行は、「句材が多かった」と好評なので、また訪れたいと思う。「葦平の町・若松」編を考えている。



出典：画集「北九州一〇一景」西川 幸夫

若松港

# 第三回 吟行記

平成十六年十二月十六日(木)

参加者 節子 聖子 光子 由紀子

## 二日市温泉 大丸別荘

今月の吟行は「忘年会」を兼ねて、節子さん、聖子さんの自宅近くの二日市温泉とする。



風邪で出席が危ぶまれていた聖子さんも参加できると連絡があり、四人全員の参加にほっとする。光子さんと由紀子はJRにて二日市駅へ。大宰府天満宮に因んでの朱色の社殿風な駅舎を出ると、すぐに聖子さんを乗せた節子さんの車が駅前に横付けにされる。予定通り十時半集合。さっそく目的地の「大丸別荘」へと向かう近くの大宰府には、車やバス、西鉄電車で何度か足を運んだことがあるが、この二日市温泉は初めてであり、「大丸別荘」は旅行本のみで見ると「一度は泊まって見たい宿」とても楽しみな吟行である。

二日市温泉の歴史は古く、奈良時代(二三〇〇年前)の大宰府政庁までさかのぼる。当時この地方で疫病が流行っていたが、神のお告げで見つけたお温に浸かると、たちまち病気が治ったという伝えのある温泉である。その大宰府政庁の元師である大伴旅人が「万葉集」にこう詠んでいる。

湯の原に鳴く芦田鶴は吾が如く妹に恋ふれや時わかず鳴く

「大伴旅人」

旅人が湯浴みした際、鶴の鳴き声に亡き愛妻を偲んで詠んだ一首であるが、



そして明治以降、この温泉場は石炭景気に支えられ、博多の奥座敷として栄える。

今でも大宰府天満宮への参拝や、大宰府政庁跡(都府楼跡)や菅原道真公が無実を訴えて天に拝んだという天拝山などの史跡巡りの拠点として、観光客でにぎわうが、別府や雲仙などの大温泉のある九州では、やや地味な温泉町である。湯煙が立ち上がることもないが、博多の奥座敷ということもあり、豊かな自然と歴史ある筑紫野を愛する文人墨客は多く、歌碑、句碑がたくさん建てられている。

温泉のまちや 踊ると見えて きんざめく 「漱石」

明治二十九年、夏目漱石がこの地を訪れた際、当時の温泉街の賑わう様子を詠んだものである。JR二日市駅には、野口雨情の「筑紫小歌」の歌碑があり、街中の温泉宿「玉泉館」には、虚子、年尾、汀子の句碑が建てられている。

更衣したる 筑紫の 旅の宿 「虚子」

温泉の宿の 朝日の軒の 照紅葉 「年尾」

梅の宿 惚ぶ心の ある限り 「汀子」

二日市駅から車で五分。柳並木の大通りに、前述の「御前湯」と明治三十九年創業の公衆温泉「博多湯」を見て、狭い湯町の道を通り抜ける。途中「虚子三代句碑の宿 玉泉館」の看板を見つめる。筑紫野インターチェンジに近い国道三二号線にでるとすぐに、今日の目的地「大丸別荘」の表玄関がある。



創業は慶応元年（一八六五年）。皇族の泊まる宿として知られ、三〇〇〇坪の日本庭園を有する純和風の造り。十一時からの入室に少し時間があるので、広い駐車場から庭園の方に回ろうとするが、木の塀に遮られて見えない。木の塀より中を覗き見る。時間がきたので、受付をすませる。フロントの女性は、和服姿でにこやかな笑顔。昭和亭の一階に案内される。

やはり平日の昼間の客はあまりいないのか、広い亭内はがらんとしており、迷路のような廊下を歩いていく。平安亭、大正亭、昭和亭とあり、それぞれに趣きが違うらしい。案内された昭和亭は、十畳十四畳半の和室で、庭に面



した4畳半には掘炬燵がある。塀が高く曇り空ということもあって、室内はほの暗い。ほどなく料理が運ばれてくるが、昨夜から風邪気味で、食欲があまりない。宿自慢の料理は、どれも小奇麗に盛られ、いつもなら残さず食べるのだが、今日はどうもいけない。それでも聖子さんの楽しいフランス旅行の話や、風邪

を引いているのに外で流れ星を見た話など聞いているうちに、だんだん元気になる。温泉に来たからには温泉に入らねばと、二階の大浴場に上がっていく。



「次田（すいた）の湯」と名づけられた一〇〇坪の岩造りの風呂は、玉石が敷かれ、露天湯にいるような感覚だ。木枠の窓の向こうは木々と空が見え、沸き流れるお湯の音と、時折聞こえる鳥の声の中で、子供の頃の川遊びを思い出す。四人貸切のお風呂で泳いでみる。

真昼間の湯に打たれつつ年忘

光子

お風呂を出る頃には、他の客も一人二人やってきたが、ほとんど貸切状態で、温泉を満喫する。大きめの木製の椅子が並べて置かれている脱衣所は、木々の匂いがする。湯冷めをしないように、コートを着て広い庭園に出てみる。

湯上りの庭園散歩冬暖か

節子

庭園の池の小島も末枯るる

由紀子

四季折々に楽しめるように作られた庭園は広く、池の真ん中には茅葺の屋根の付いた橋がかかり、その橋で休めるように掛け椅子が設えている。紅葉の季節は過ぎたが、大きな楓が二、三本冬池に彩りを添えている。渡り廊下近くの池の面には、敷きつめたように紅葉が浮かんでいる。

一陣の風に降り積む冬紅葉

光子

散りてなほ池面彩どる冬もみじ

聖子

橋の手前には、昭和天皇来荘記念の碑があり、その横には他の皇族

の記念の松が植えられている。新しいものには、つい一ヶ月半前の「とびうめ国文祭」の開会式にご出席された皇太子の来荘記念の松がある。亭内の廊下には、昭和天皇来荘の折使われたお膳一式などが、壁一面のガラスケースの中に収められていた。



冬日さす陛下下来荘記念の碑

節子

皇族も泊まりし温泉宿冬紅葉

由紀子

ゆっくり「大丸別荘」を堪能したが、句会の時間がなくなりつつある。時間がなくなれば温泉付き「食事会」のみということだったので、句会なしとする。ただし課題として、「覗きみる・・・冬紅葉」をつくることにする。

覗き見る日本庭園冬もみじ

覗き見る塀にひろがる冬紅葉

覗きみる古い愉しんで冬紅葉

のぞきみる女の本音冬紅葉

忘年会は句会なしとなったが、やはり一句でも二句でも句会をしたほうが、引き締まるような気がする。酉年は、さらなる飛躍の年となるべく吟行句会を楽しむことにしよう。



大伴旅人の句

## 第四回吟行記

平成十七年一月十三日(木)

参加者 節子 聖子 光子 由紀子

### 宗像大社 初詣

二〇〇五年の始まり。元旦より雪。若松では少し粉雪が舞うほどだったが、皿倉山などの山々は真つ白に雪化粧をしている。テレビで見ると他の北九州地区も十〜二十センチの雪が積もっている。電車やバスのダイヤの乱れや、高速度路の通行止めなど波乱の幕開けとなるが、元朝の積雪は、格別な思いを抱かせる。俳句を詠む人ならずとも一面の銀世界を前に、これから始まる一年に思いをめぐらせ、どのような足跡をのこすのだろうかなどと、多かれ少なかれ思うのではなからうか。

九州組の吟行句会は、昨年五月から始まり、六月の聖子さんの参加によって四人で行われるようになる。なりゆきで名づけた「あしや句会」だが、俳句を楽しむことをモットーに月一回集まっている。

初句会は「宗像大社へ初詣」。古くから海上安全・航海の神様と知られ、現在も交通安全の守護神として人々の崇敬を集めている大社に、四人揃って御参りをする。これからも楽しく「俳句の道を進むことができればと思う。

一月十三日十時半すぎJR鹿児島線赤間駅に集合。赤間駅は快速が止まり、日に何本か特急電車も止まる駅なのだが、駅舎は小さく、駐車スペースがほとんどない。遅れて着くと駅前待っている。すぐ宗像大社まで車を走らせる。赤間の市街地より釣川に沿って十分ほど行くと、こんもりとした森が見える。広い駐車場には、何台か観光バスやマイクロバスが止まっているが、松の内を過ぎた大社を詣でる人はそれほど多くない。



の安全を祈願しに必ず参拝したといわれる。弘法大師、菅原道真、山上憶良、阿部仲麻呂らの参拝記録が残っている。

#### 宗像三神とは

田心姫神(たごりひめのかみ)・・・沖津宮(第三宮)(沖ノ島)

湍津姫神(たぎつひめのかみ)・・・中津宮(第二宮)(大島)

市杵島姫神(いちきしまひめのかみ)・・・辺津宮(第一宮)(宗像市)

この沖津宮、中津宮、辺津宮の三宮を総称して宗像大社という。

本殿までまっすぐ進み、お参りをする。いつもの初詣であれば、破魔矢やお守りを買って、おみくじを引いて帰るのであるが、今日は本殿の脇にある門を抜け、案内板に沿って「高宮」へと向かう。高い木々に覆われた緩い上り道を登っていく。途中小さな橋を渡ると、石の階段があり献灯が灯されている。かさかさと音がするので、林の中に目をやると雀が何羽かいる。



献灯の灯りほのかや初詣

光子

道の神祀る大社の冬木の芽

由紀子

奥宮へ続く林の青木の実

節子

寒雀林の中を歩きをり

聖子



原生林のような林の中、合わせて一一九段の石段を登ると、大社の一番奥に辿り着いたという気持ちにさせる神秘的な場所に着く。真正面に小さな社があり、これが「高宮」かと手を合わせる。なにげなく横をみると、一種異様ともいえる空間がそこにある。見た目に十〜二十メートル四方の空間に石が四角に並べてあり、中央に台がある。奥には地面より

幾本も幹がでている木が生えており、注連縄がされている。立て札を読むと、宗像大神ご降臨の地とされる「高宮祭場」で、現在も古式にのっとりとお祭りが行われている全国でも数少ない古式祭場らしい。聖地のような雰囲気、気後れしながら、階段を下りていく。

飛び立ちもせずに社の寒雀  
寒林を歩いて裏のお社へ  
光子 節子



「高宮」の坂を下りきった径から、案内板に従って「第二宮」「第三宮」へと向かう。このあたりは大古の時代より続いたお社らしく、巨木ばかりで、その中でも目を引く巨木には注連縄をしている。径沿いに「神木 相



生の樫」という二本の木の幹から出た枝が一つにつながっている珍しい木がある。夫婦円満、恋愛成就のご神木らしい。「第二宮」「第三宮」の並ぶ社に入っていく。ここは、沖の島にある沖津宮と大島にある中津宮の御分霊を祀

っている。玉砂利の敷地に建つお社は、唯一神明造とかで、伊勢神宮の式年遷宮で払い下げられた材料で建てられたものだ。

初詣唯一神明造とや  
遷宮の古材の社注連飾  
光子 節子

径をはさんだ反対側には「神宝館」がある。

入り口が遠く、今回は行かなかったが、ここには沖津宮のある沖の島で見つかった大和朝廷時代の鏡、金製の指輪、勾玉など多くの国宝が展示されている。約十二万点にのぼる貴重な出土品から「海の正倉院」といわれる沖



ノ島は、国の重要な祭祀の場所だったようだ。本殿へと戻る。始めに御参りした時には気づかなかったが、境内には「神木」と書かれた大きな檜の木が何本もの石柱に支えられて立っている。

神木の檜の冬芽を仰ぎみる  
注連飾大神木を仰ぎみて  
由紀子 光子



檜の葉は、宗像大社の御神紋にもなっている。本殿横の授与所でお神酒少々と昆布をいただく。そして「福みくじ」。それ

ぞれの「吉」を持ち帰る。収穫の多かった大社をあとにして、「玄海ロイヤルホテル」へと向かう。車で海岸の方向へ十分くらい走る。どこにでも見





られる田舎の風景の中に、十三階建てのホテルがある。

民家を抜けて広々としたホテルの入り口にはいる。駐車場の横にテニスコートが四面ある温泉付きのリゾートホテルである。近くにゴルフ場があり、ホテルの裏手には「さつき松原」という五キロほど続く松林と砂浜があり、神湊、鐘崎といった漁港もあるので、特に夏は海水浴客や釣り客などでにぎわうのであろう。前々日下見にここにやってきたが、冬の「さつき松原」は、「拉致」という

言葉が浮かぶほどさみしい所だったので、松原を吟行するのを取りやめにする。

玄海ロイヤルホテルのロビーは広く、真正面に小振りだが金屏風が置かれ花が飾られている。共に飾られた餅花が、まだお正月の気分を残している。レストラン「四季」にて昼食。ガラス越しにプールのある庭が見える。昼食後、係りの人にドアを開けてもらい庭に出る。寒くどんよりした天気なので、庭には四人のみ。寒々しく噴水が上がっているが、洋風な庭は手入れが行き届き、芝の周りにはパンジーがたくさん植えられている。プールの向こうに教会がある。松林の方から鴉の鳴き声が聞こえてくるが、結婚式が催される時には、この庭に美しく着飾った若い男女が談笑するのだろう。

何呼んで心細げに寒鴉

聖子

雲間より鳴き交わす声寒鴉

節子

節子さんと教会に入ってみる。光子さんがすでに入っている。あとから聖子さんもくる。パイプオルガンの曲が流れる中、しばらくバージンロードの前に佇む。それぞれに思うことがあるのか、言葉数が少ない。

教会は冬すみれ咲く芝庭に  
餅花やロビーの奥に句会場

節子  
由紀子

ロビーにしばらく座り、句作。奥のティールラウンジにて句会。句会では、やや節子さんが低調だったが、結果はごらんの通り。だから面白い。赤間駅にて解散。寒い一日だったが、いつものようになごやかに終る。

この一年、またお付き合い下さいね。



# 第五回吟行記

平成十七年二月十日(木)

参加者 節子 聖子 光子 由紀子

## 太宰府天満宮

曇っているが昨夜の大雨は上がり、傘をささずに吟行ができそうだ。今月は太宰府天満宮の梅を見る予定。八時三四分の快速で折尾駅から光子さんと大野城へ向かうが、お互いこの時間に電車に乗ることが少ないので、あたふたと折尾駅まできて、あわてて電車に乗り込む。聖子さん、節子さんに北九州方面に来てもらうことが多いが、あらためて有難いと思う。

大野城駅では、私たちが迷わないようにと改札口近くで待っており、すぐ車で太宰府天満宮へと向かう。近くの駐車場に止めて、歩いていく。お土産屋の並ぶ参道からではなく、境内の裏手からだ。天満宮近くの民家は、自宅の駐車場を有料にしているところも多く、さすがに天神様のお膝元だと感心するが、観光地の近くはこうなのかもしれないと一人納得しながら、境内へと入っていく。

すぐに梅林がひろがっている。このところの寒さもあって、全体的には一〜三分咲きというところ。梅は桜と違って、満開より咲き始めのほうが風情がある。特に今日のような雨上がりは、開こうとしている紅梅や白梅の蕾に雨雫が残り、芽吹ききの春の到来をより感じさせる。しつとりと濡れた梅林を歩く。境内の奥まったところに、一本浮き上がるように白梅がほころび始めている。うすみどりの蕾は、雫の中に透き通るようにある。

白梅になおとどまりし雨しずく

光子

点々と梅の蕾と雨の粒

節子

雨上がる梅の社に遊びけり

由紀子

一しずく雨を含むや紅の梅

聖子



境内に名物の梅が枝餅の店が何軒かある。香ばしい匂いと元気な掛け声。まずは腹ごしらえと、お店に入ることにする。先ほどの白梅より奥まったところにある「お石茶屋」がお勧めということで、迷わずそこに決める。広い土間に椅子掛けのテーブルが置かれ、コの字形に畳。昔の茶屋そのままだ。梅が

枝餅の皮が、ぱりつとして美味しい。たしかに「おいしい茶屋」である。聞けば筑前三大美人の一人と言われたお伊シさんの茶屋」ということで、看板娘の彼女を一目見ようと大勢の人が集まったという。数多くの政治家や文化人も度々立ち寄ったというから、美貌のみならず、その人柄もよかったのである。店の入り口近くに、歌碑と句碑が並んである。



宰府のお石の茶屋に餅食えば旅の愁ひもいつか忘れむ

「吉井 勇」

紅梅にイ(た)ちて美し人の老

「富安 風生」

風生の「街の雨鶯餅がもう出たか」(昭和十二年)を思いだし、風生もまたこの店で、あつあつの梅が枝餅を頬張ったのであろうと思うと、一段と味わい深くなる。

焼餅の香に包まれて梅開く

節子

太宰府天満宮には六千本の梅の木があるという。その梅の蕾の下を通って本殿まで来る。本殿の中では、祈願を受けている人が頭を垂れて座っている。それぞれにお参りをして、本殿右側のご神木「飛梅」を觀賞する。左側の紅梅は二三分咲き。他の梅より先駆けて咲くという「飛梅」は満開で、その前で写真を写す人が次から次に入れ替わる。



東風ふかばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれそ

「菅原道真」



歌碑は境内の入り口にある。九〇一年早春、無実の罪で京を追われた道真公の惜別の歌。一夜のうちに飛来したといわれる「飛梅」。道真公は左遷されてから2年、苦悩の末に生涯を終えるが、一

一〇〇余年経った境内は、「飛梅」と学問の神様として祀られている彼にお願いする絵馬札がぎっしり掛けられている。本殿より楼門へと出る。左右に銅牛の像が座っている。銅牛や石牛の像は他にも見かけられるが、うし年生まれの道真公が亡くなられた後、彼の遺骸を乗せた牛車が北東（うしとら）の方向に進み、その牛車が止まり動かなくなった所に葬られたことによる。

また牛が当時の農耕生活のシンボリック的存在だったこと



も大きく関係しているようだ。悲惨な死をとげた彼に対する同情と悼みの思いが人々の心に深まり、その後起きるさまざまな天変地異や要人の死、疫病の流行などは、彼の怨霊によるものとされる。怨霊と天

信仰と農耕生活が結びつき、何とか怒りを鎮めようと、小さな祠だった道真公の墓所は、次第に大きな建物となり祭られるようになる。太宰府天満宮の始まりである。その後兵火等により数度炎上しているが、一五

九一年の筑前国主小早川隆景が造営したが、現在の本殿である。今でも本殿の真下には道真公の柩が鎮まっているのだという。牛も神牛として境内に座り、今では祈念を込めて撫で擦れば、病氣全快すると信じられている。神牛の頭部を擦れば知恵がつくというので、何度も擦ってみる。



この先に絵馬堂があるというので行ってみる。よく見えないほど古い絵馬が四方に飾られている。

境内に古き絵馬堂梅三分

光子

中世に和歌より気楽に楽しめる連歌というものが流行し、和歌の神として崇められていた道真公が、連歌の神としても尊ばれる。北野天満宮をはじめ、各地の天満宮で連歌の会が開かれ、連歌をささげ、神の心をなぐさめようと、その作品を大きな額に書いて奉納することがしきりに行われたという。この絵馬堂は一一八三年に建立され、九州に現存する単体の絵馬堂としては最大最古のものらしいが、同じような連歌絵馬かどうかかわからない。だが、天神様は時代を越えて、奉納



された絵馬を心なごやかに見ておられるであろうし、今の世の切実な願いを書いた絵馬札にも心くばっておられるのではなからうか。

「心字池」にかかる御神橋を渡る。「心字池」は天満宮は大きな「心」に包まれているということ为名づけられ、御神橋は、太鼓橋・平橋・太鼓橋からなり、仏教思想にいう過去・現在・未来の三世一念を表現していると伝えられる。この橋を渡ると心身共に清められるという。

今回は境内の裏手から入り、普通の参拝とは順路が逆だが、以前訪れた時とは違ったものを感じることができたと思う。「俳句の目」を通しての天満宮だからかもしれないが・・・大鳥居をくぐり表参道へと出る。振り返って天満宮を眺める。千年を経た信仰の中で、恐ろしい神はすっかり浄化され、寺子屋の普及とともに庶民にも親しまれる天神様となる。訪れる人々の穏やかな顔。歴史の重みを感じる。

参道からすぐ右手に「光明禅寺」に行く道があるが、その道沿いの「水月庵」で昼食をとる。こじんまりとした和風のお店。玄関には蟬梅と白椿、太宰府の神事「うそ替え」の絵が飾られている。通された小部屋からは庭がみえる。鶏と野菜の「山家鍋定食」を注文する。あつあつの鍋に温まり、フキノトウの天ぷらに舌鼓をうつ。

よき一日でした。多くの文人が訪れ詠った筑紫野は、やはり魅力ある所だ。若葉、紅葉の時期の再訪を楽しみにしている。

(参考)・・・「大宰府」と「太宰府」の違いについて

「大宰府」は大君の詔で働く役所の意味で、現在では、史跡や当時の役所を意味する時は「大」を使い、太宰府市や太宰府天満宮などの固有名詞の時は「太」を使う。

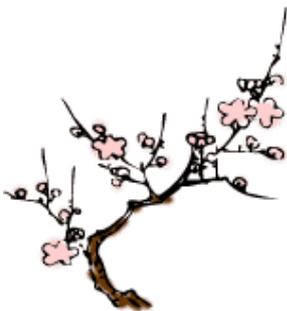
紫野の空晴れゆきてふきのとう

由紀子

ふきのとう口いっばいに春がくる

聖子

早春のやわらかな日差しをさす庭をながめての句会。甘酒でしめくくる。



## 第六回吟行記

平成十七年三月十七日(木)

### 魚見公園・芦屋釜の里

参加者 聖子 節子 真理子 光子 由紀子

昨日の天気と打って変わって、今日は朝から雨が降る。去年の信州の夏行で一緒にした福岡の真理子さんが、参加してくださるとの連絡がはいり、響灘を望む若松北海岸の風景とグリーンパークの花を楽しんでもらおうと思っただが、この雨に急遽「魚見公園」と「芦屋釜の里」に変更する。今回の「魚見公園」は通称「あしや句会」の原点ともいうべき、第一回の吟行地でもある。その時は、節子・光子・由紀子の三人で、三句出し、三句選句の、忘れたい吟行句会となったが、そのなんとも言えない面白さが、聖子さんの参加でパワーアップされ、会を続ける原動力になっている。

第一回の吟行日も、こんな雨だった。真理子さん参加の今回の雨も、きっと慈雨にちがいない。

折尾駅十時二十分集合。渋滞のため折尾駅に来れなかった光子さんを前駅の陣原駅で車に乗せ、芦屋町の「魚見公園」へと向かう。



北九州の若松区に隣接した芦屋町は、遠賀川の河口に拓けた町である。筑豊を貫流して響灘に注ぐ遠賀川。往時炭鉱から運ばれる石炭を乗せた五平太船が七千艘も行き交ったというが、今では菜の花やコスモスが河川敷いっぱい咲き、家族連れや小舟で釣りを楽しんでいる人など憩いの場所となっている。その遠賀川の突端ともいえる芦屋漁港を見下ろす「魚見公園」には、国民宿舎「マリントラスあ



しや」が建ち、展望台や遊歩道などが整備されている。昼食の時間まで公園を散策する。海に突き出した展望台への坂道を登る。雨風はさらに強まってきたが、途中広場になっている松の木々に囲まれた崖上より響灘を見渡す。

茫々と広がる海や春の雨  
提越えて波打ちしらむ春嵐  
聖子 真理子



漁港は人影も出入りの船もなく、河口に架かる「浪懸(なみかけ)大橋」にも走る車が見えない。町も港も海も雨に打ちけむり、湾をなす正面の小山の姿もぼんやりとしか見えない。この山は、古名を木綿間山(ゆうまやま)といい、万葉集に詠われている。

万葉の山を隠して春嵐  
空と海とけて白波春の海  
海なると思へば春の大河なり  
由紀子 節子 光子

遠賀川流域は近代では石炭で賑わったが、肥沃な土地と大陸との交易の接点ということから、古代から栄えていたようだ。芦屋は「岡水門」「岡湊」(おかみなと)とよばれ、木綿間山のみならず万葉集に詠われている。「魚見公園」にはその歌碑が崖上に建っている。



天霧（あまぎ）らい日方（ひかた）吹くらし水茎の  
岡の水門に波立ちわたる  
作者不詳



朱鳥は何度もここを訪れたという。

空が曇って東南の風が吹くらしい。遠賀川の河口に波が一面に立っている  
歌碑の手前に野見山朱鳥（一九七〇年没）の句碑が建っている。虚子にして「・・・に茅舎を失ひ今は朱鳥を得た」といわしめた野見山朱鳥。すぐ近くの直方市に住んでいた

鶉の湾を八重の冬濤打ちしらめ

「野見山朱鳥」



崖上から見下ろすと「打ちしらめ」と言う言葉を実感する。

今日の雨と風は弱まりもせず、聖子さん、節子さん、由紀子は、この先にある展望台に行くのをあきらめ「マリンテラスあしや」の建物に入り、床から全面張りのガラス越しに湾内の景色や今登ってきた崖（岬）を眺める。崖下に沿って遊歩道があり、岬をぐるりと周ることが出来る。こちらから眺めていると、傘を斜めにした真理子さん、光子さんがその遊歩道を返ってきている。展望台にも行き、遊歩道も回ろうとしたのだが、傘の骨も折れ強い雨風に押し返されという。吟行に対する真摯な姿に頭の下がる思い。（今日の風が例年になく遅い春一番だったと夕方のニュースで知る）

強東風の岬回れず戻り来し  
岬山へ春一番と知らず行く  
真理子  
由紀子

窓辺の席で、春の嵐が湾内を煙らせているのを見ながら昼食。九品ほどある会席料理に満腹。

大窓に春の嵐の迫り来る  
節子  
光子  
鶉一羽低く飛びけり春嵐



少し雨が収まったところで公園の急坂を下り、隣の「芦屋釜の里」に行く。平成七年にオープンした施設で、鎌倉時代、室町時代に茶の湯釜の名品として一世を風靡した芦屋釜の復興と研究、さらに茶の湯を通して文化の復興という目的で作られる。芦屋付近で採れる良質な砂鉄を原料にして、中国から戦乱を逃れてきた工人が伝えたと言われる高度の鑄造技術によって作られた「芦屋釜」は、大内氏の筑前守護代らによって京都へ土産物として持って行かれ、名声を博した。芸術性、技術力に対する評価は今なお高く、国の重要文化財に指定されている茶の湯釜九個のうち八個が芦屋釜というから驚く。



茶釜作りは桃山時代に終ったらしいが、四〇〇年の歳月を超え、工房では平成八年よりから作品が作られ、現在も続いている。

石砂利の駐車場から石畳を歩き長屋門を抜けると、三〇〇〇坪の日本庭園の中に、工房のほか芦屋釜資料



館・大小の茶室・手軽にお抹茶をいただける立札席が点在している。工房の入り口には「水琴窟」があり、耳を澄ますと雨の中かすかに聞こえる。今日は工房で制作している人はいない。露地のある茶室「吟風亭」へと続く径。沈丁花の香りが包み、侘助が雨にうなだれている。



沈丁の群従えて立つ椿

聖子

釜工房閑散として白椿

由紀子

赤の八重白の侘助誰に似る

光子

露地口に沈丁白く咲きにけり

節子

しべしづくくぐりて沈丁香りくる

真理子



鳥の音がする。目をこらすと常鶴。辛夷の花が開き初めている。掌に包みきれないほど大きな八重の赤い椿がたくさん咲いている。「魚見公園」の吹きつける雨と違い、木々に囲まれた庭園は静かに降る。大茶室「蘆庵」に入り、庭園を眺めながら句作。その後、立札席にてお抹茶と筍の干菓子をおいいただいてから、五句出しの句会をする。小人数の句会ならではの良さで、それぞれに自分の選んだの句の評をする。自分の句がどのように人に解釈され評価されるのか、率直な意見が聞かれるので楽しみの一つだ。自分自身が描いた以上の奥行きを感じとってもらうこともあるし、思い入れが強すぎて相手に理解されないこともある。人の評はありがたい。遠慮なく言い合える今の雰囲気を大切に

したいものだ。今年は桜の開花が遅い。「魚見公園」はこの辺りでは桜の名所。県道から入る坂道に沿って桜の木が植えられている。しばらくすると「花の公園」の顔を見せてくれるであろう。霞、大夕焼け、紅葉、冬波など、同じ場所でも違う顔があり、違う感じ方がある。あるがままをあるがままに詠んでいくことができらばと思う。

三時半折尾駅解散。雨風の中でも楽しめるのが俳句ですね。お疲れさまでした。



# 第七回吟行記

平成十七年四月十四日(木)

参加者 聖子 節子 真理子 光子 由紀子

## 太宰府(岩屋城跡・都府楼跡)

前回の太宰府吟行の時は、時間ぎりぎりまで電車に乗り込んだが、学習効果ありで、光子さん、由紀子ともに待合室で待つ程の余裕をもつての太宰府行きとなる。博多から乗り込んだ真理子さんと、大野城駅のホームで合流する。改札口で聖子さん、節子さんが手をふっている。

今回もわくわくしながらの筑紫野の吟行である。車の中で今日のスケジュールを聞く。このまま「岩屋城跡」に車を走らせると言う。太宰府天満宮以外に光明禅寺、戒壇院、観世音寺、都府楼跡など多くの史跡があり、俳句会などでは必ずといっていいほど訪れる場所ではなく、はじめて聞く「岩屋城」に「なにがあるところなの？」という素朴な疑問と、観光化されていない地元の人しか知らない穴場的な所かもしれないという期待とが入れ混じる。



車は天満宮の参道横を過ぎ、赤い欄干の橋を渡る。橋のあたりには人家が建て込んでおり、人家の番地を記す標識が薄紫色の鉄板で「連歌屋二丁目三番」などと書かれている。標識を美しいと思ったのは初めてである。だんだんと家は少なくなり、舗装されているが山道に入っていく。いくつものカーブを曲がり、だいぶ高くなったところに看板を見つける。道路脇の路肩に車を停める。ここは大野山四王寺山(しおうじやま)の中腹という。看板には、大野城、岩屋城の説明があり、ここが登り口になっている。道野辺には桜の樹が多く植えられており、花散る山道だ。登り口近

くにはつる日々草が一面に咲き、あけびの花も咲いている。

四王寺の山をつらつら花通草  
からまりし通草の花の山径を

節子  
由紀子

岩屋城へと登っていく。人ひとりしか通れない狭い道だが、凹地になった階段がついていて登りやすい。途中「大野城」への分かれ道がある。足元には花の屑が散り敷き、頭上から春の日差しを受けて桜花がひらひらと舞い散る。なんとも言い難いほど美しく贅沢な気分にしてくれる。

ゆるゆると散る花びらや日の永し  
はらはらと残花の四王寺谷崩れ  
山道の光の中に花一片

聖子  
真理子  
光子



七〇八分ほど登ると頂上らしき所に着く。ここからは太宰府の町が一望できる。眼下には都府楼跡、天満宮、建設中の国立博物館などが見え、宝満山などの山々がなだらかに町を囲んでいる。一幅の絵のようである。福岡市在住の真理子さんも、太宰府には何度も足を運んだが、ここは初めてだと言う。

「岩屋城」の歴史を読むと、もともとこの大野山には七世紀にできた我が国最古の朝鮮式山城の「大野城」があり、西方の水城(みずき)、南方の基肄城(きいじょう)と共に唐・新羅の連合の襲来から「太宰府政庁」を守る役目をしていた。



「岩屋城」は大石塁、土塁などが残っているこの大野城跡の一部を利用して戦国時代に築かれたものである。本丸、二の丸、三の丸が残り、私たちが休んだのは、本丸跡である。ここには「嗚呼壯烈岩屋城址」の石碑が建っている。書かれている字の大きさに驚かされる石碑である。豊後の大友氏の城で、その家臣の高橋紹運（じょううん）が守っていたが、一五八六年九州制覇を目指す島津軍五万の大軍が押し寄せ、城兵わずか七六三名で、激戦十余日の末、全員玉砕落城した。籠城中は一人の逃亡者も出ず、城主のもとに全員玉砕したことは他に例がなく、戦国武将の鏡として語り継がれているという。

玉砕の岩屋城址囀に

真理子

「嗚呼・・・」の石碑を除くと、暖かな春の風が吹き渡る山の中腹から眺める景色は長閑そのものだ。木々が芽吹き、どこからともなく蝶が現れ消えていく。

山城の雲なき空に木々芽吹く  
 そびえ立つ岩屋山城春かすみ  
 方形の都府楼はるか風光る  
 みはるかす都府楼の跡蝶飛んで

由紀子  
 聖子  
 真理子  
 光子

これから山を下り、眼下に広がる都府楼に行くという。登ってきた花の山道に戻る。鳥がどこかで鳴いている。



行くも惜し暮るるも惜しき花の春  
 一身に光を受けて花一片  
 光射す山のかげへと飛ぶ落花

聖子  
 節子  
 光子

車をUターンさせ、大宰府の町中へと入っていく。広い道路の道沿いに「都府楼」があり、駐車場に車を停めて、そこから歩いていく。広い草原の史跡は、その歴史を知らなければ所々に石のある広っぱに過ぎない。実際岩屋城から見た「都府楼」は草青む方形の史跡だったが、足を踏み入れると、遠足の子供達や幼子をつれた若い親子連れなどで賑わっている。走っている子供たち、ゲーム遊びをしている教師と子供たち、ベビーカーを並べてシートの上で談笑しているお母さんたち、桜の木の下で寝転がっている若者など、春の一日を楽しんでいる人達であふれかえっている。節子さんの誘いで大極拳を二人でやってみる。これだけの人の中では何をやっても目立たない。「都府楼」で大極拳とは絵になる構図だと思いが、まだまだ覚えていない由紀子は、残念ながらすぐにリタイヤする。

うららかや太極拳の人ふたり  
 都府楼を遠足の子等埋めつくし  
 大宰府の森巡る道草若葉

光子  
 由紀子  
 節子

吟行の楽しみの一つに、その歴史を知ることがある。「筑紫野」や「都

府楼」に惹かれるのも古代文化がいち早く開けた所だからだ。もともと大宰府が設けられたのは、唐・新羅軍から国を守るためであるが、やがて外交の府、九州の都督府（ととくふ）として発達する。内政はもとより、帰化人の受け入れ、遣唐使の送迎、大陸・半島との交易による異国文化や物資の輸入など、すべての政治が行われるようになる。「遠の朝廷」（とおのみかど）と呼ばれ、文化的には万葉集の「筑紫歌壇」が形成される。大宰帥（長官）の大友旅人、筑前守の山上憶良、小野老などが中心となり、梅花の宴が催されたりしている。

やすみしし吾が大君の食（お）す国は大和もここも同じとも思ふ

「大友旅人」

決して誇張ばかりではなく、建物の規模も大きく街も繁栄したであろう。だが一方、京から遠く離れた僻地筑紫からのがれたいという気持ちも詠まれている。

あをによし奈良の都に咲く花のおうがごとく今さかりなり「小野 老」

淡雪のほころほころ零（ふ）りしけば奈良の都し念（おも）ほゆるかも

「大友旅人」

京への郷愁である。花につけ、雪につけ、京への思いが胸を灼く。旅人が筑紫に下ったのは七二六年頃、そこに憶良がいた。「筑紫歌壇」という風流な文化人の集まりがあったとしても、当時京からは、はるけき筑紫なのである。そして九〇一年菅原道真がこの地にやってくる。筑紫歌壇の盛時からずっと後である。以前の都府楼跡は叢におおわれ荒涼としていたらしい。叢と礎石ばかりの廃墟。歴史を考えるとその方が似合っているのかもしれない。

今も礎石ばかりで建物などないが、公園として整備されている。今秋には「九州国立博物館」が開館する。

吟行のもうひとつの楽しみは食事。近くの日本料理「田惣」を予約しているという。歩いていける距離だが句会などの時間を考えると車の方が都合がよい。春の野の花が咲く道を抜けて行く。少し高めの土塀の上に「田惣」の看板があるが、食事処というより広い庭のある民家のような。縁側、欄間、太い梁など、だんだん少なくなっていく日本家屋をそのままに残している。葉を読むと、昭和初期博多人形を商う商家の別荘として建てられた日本家屋を、宮大工がさらに手を加えたところ。堀炬燵のように腰掛けられるテーブルに「点心弁当」が並ぶ。旬の野菜が小奇麗に盛られている。また来たいと思わせるお店に満足、満足。

続いて、いつものように五句出しの句会。「岩屋城」の散りゆく桜の句がだされる。吟行句会の良いところで、今日一日の感動の景色がもう一度再現される。それぞれに感想を述べ合い句会終了。「花の屑」の句が何句か出句されたが、聖子さんの「花の屑」を美しいものとして捉えることができたという言葉が印象に残る。

谷風に遊ぶ花屑我もまた

真理子

花くずを流さぬほどの小流れに

由紀子

山道のどこまで行っても花の屑

節子

二日市駅まで車で送ってもらい解散。楽しい句会でした。

感謝！



# 第八回吟行記

平成十七年 五月十二日(木)

参加者 嘉 徳子 札子 キミ子 聖子 節子 光子 真理子 由紀子

## 若戸大橋周辺・若松北海岸(千畳敷)

今回の吟行は、次郎丸句会の方々との合同句会となる。はじめてお迎えするとあって、いつもより準備に気合がはいる。場所選定はおまかせするといふ。北九州の見どころはいろいろあるが、若戸大橋周辺と風光明媚な若松北海岸が、我が町「若松」を代表する所なので、ここを案内することにする。



当日折尾駅を集合場所として若松駅へと向かう。折尾駅でJR筑豊線に乗り換えだが、乗り換え時間が五分しかない。出来るだけ先頭車両に乗るようにお願いをし、プラットフォームで待っている光子、由紀子がすぐ階段をおりて筑豊本線の一番ホームへと誘導する。電車はすでにホームに入っているが、乗客はほとんどいない。折尾駅の構内はちよつとした迷路。大正五年建設のレトロな駅は、小さいながら筑豊線と鹿児島本線が立体交差しているの、各ホームへの連絡路が慣れない人にはわかりづらい。日本初の立

体交差駅らしい。  
若松駅まで二十分の二両の電車の中で、挨拶をかわしながら沿線の風景やおしゃべりを楽しむ。通勤、通学の時間帯には混む電車も、この時間降りする人はごく僅かだ。到着の若松駅の改札口をでてから、本日のスケジュールを確認する。一時間の予定で若戸大橋周辺を散策。駅のすぐ目の前に広がる若松港は、洞海湾を渡す若戸大橋の下に静かに漁船や巡視船を繋がせて

いる。若戸大橋開通時以来の再訪となった徳子さんは、懐かしげに大橋をながめ、今は車専用で人道がなくなっていることに驚く。薄曇りの中、皿倉山はかすかにしか見えないが、湾に沿って楠の木や花水木の若葉が美しく風に揺れている。

駅前の楠に集合若葉かげ

石炭の町へ二両の夏電車

夏霞む皿倉山も煙突も

節子

光子

次郎丸



駅より湾に向かって広場があり、奥に機関車が据えられている。「石炭操車場跡」の案内板。石炭輸送で栄えた名残りである。私たちが折尾駅から乗り込んだこの鉄道は、かつて石炭が大量に運ばれていた。若松の繁栄も衰退も石炭抜きでは語れない。明治二十年代まで好漁場であった洞海湾は、鉄道敷設



や軍需のための鉄鋼需要の増大により、日本最初の官営製鐵所ができてから激変する。もともと筑豊の石炭は、福岡・小倉の旧藩時代から藩の統制下におかれ、財政に寄与する物資として米などとともに遠賀川を下り、運河(堀川)や江川を通じて洞海湾の若松へと運ばれていた。明治になって石炭の自由採掘・販売が認められると、採掘は機械化が進み、地元の貝島、帆足、麻生、安川などの炭鉱主のみならず、三菱、住友、古河、三井などの財閥や大資本が進出し、石炭の増産体制が整



備されていく。増産された石炭は、江戸時代に遠賀川の洪水・灌漑対策や物資の輸送のため造られた堀川運河で若松に運ばれる。



その石炭輸送も一八九一年（明治二十四年）鉄道開通により容易になる。そして製鐵所の建設。鉄道と遠賀川の五平太船で運ぶ石炭の輸送にかかわる沖仲仕「こんぞう」の活躍した時代である。定住する農耕型の文化と対照的な川筋気質と呼ばれる気風は、炭鉱夫や五平太船の船頭から出たものであるが、「こんぞう」たちにも共通している。彼らは親分の名を冠した労働・生活一体型の組織をつくり、一種義兄弟的な社会を形成する。若松はそんな彼らが一時代を作り上げた町でもある。

火野葦平が「すべてのものの底から、沸きあがって来る力動的な騒音……この海は生きている」と表現した洞海湾の風景。

こんぞうの謂れ港に燕飛ぶ  
次郎丸  
大橋のわたる薄暑の町の上  
光子  
錆の色染みて若松夏の潮  
真理子

いま目の前に広がる洞海湾は、工場群が立ち並び大型船舶が行き交うも、この石炭輸送が過去のものであるように、一部観光用に港が整備されている。朱色の大橋の下に、旧古河鉱業のビルが市民のサークル活動に利用され、広い駅構内だった敷地は集合住宅が立ち並びニュータウンに変わっている。駅前の公園のベンチで、制服姿の女子高生数人があぐらをかいて話している。彼女たちは、この街の繁栄を歴史の教科書でしか知らない。

薰風や繫がれしま、の保安艇  
次郎丸  
船具店の日除けテントや夏きたり  
聖子  
石炭のかつては港葉桜に  
由紀子  
白き船白き波立て夏の海  
節子

若松駅前の道路を挟んである「若松市民会館」には「火野葦平資料館」があり、時間があれば見学の予定だったが、迎えるバスの時間が近づいてきたので割愛する。ここには「こんぞう」とその時代に生きた人々のドラマが描かれた「花と龍」の映画ポスターが何枚も展示されている。

十一時三〇分 昼食と句会予定の料亭「魚庵千畳敷」の迎えるマイクロバスが駅前待っている。ここから二十分ほどにある若松北海岸へと向かう。途中風力発電所が見えるようにバスを走らせてもらう。バスは若戸大橋の北側に広がる中小工場密集地を抜けていく。響灘を埋め立てた「響灘エコタウン」の近くにある九基の風力発電機は、ゆっくり大きく回っている。一基は動いていない。「響灘コンテナターミナル」の開港をひかえ護岸工事をしているのが見える。



夏の風風車左に回しいる  
真理子  
ひびき灘起重機高く夏霞  
次郎丸

バスは埋立地のまっすぐ広い道路から、海に沿って畑に囲まれた道に入っていく。

あたりの景色が一変する。昔ながらの農業と漁業の若松の顔だ。このあたりの「キャベツ畑」は若松の風物詩でもある。もう少し中に入ると畑がひろがっているのだが。



「魚庵千畳敷」の看板のある入口がみえてくる。道路から参道のような砂利道にはいり門を抜ける。葉桜と梅の実がたわわになっている。径を曲がると、駐車場と木々でおおわれた玄関への径がある。杖らしき木が何本も用意されている。打ち水された大きな石の階段をゆ



つくり下りていく。竹林が美しい。店先の大きな提灯をみながら中に入る。待合室や土間を抜けて行くと、一面青芝の広い庭。そこから部屋へと案内される。仲居さんが次々に料理を運んでくれる。昼食後一時間の吟行。皆広々とした青芝を下りて千畳敷の海岸へと歩いて行く。海辺には白い船形をしたレストランがあり、眼前に千畳敷の岩がひろがっている・・・はずだったが、今日は干潮時間が遅く千畳敷の岩が見えない。わずかに岩礁があるらしきところに白い波が小さくたっている。

じぐぎぐに岩にぶつかる夏の波

聖子

ただ遠く眺むる灘の夏めいて

由紀子

露台より眼前すべて夏の海

次郎丸

灘よりの風は心地よい。夏霞に水平線ははっきりしないが、かすかに船や島々が見える。

二時より句会。今回は十句ということで不安はあったが、何とか出句する。若松南海岸と北海岸を駆け足吟行となったが、力作が揃う。合同句会ということで、いつもの句評をするに至らなかったが、それぞれに少し緊張感のある句会ができて有意義な時間を過ごすことができたのではないかと思う。マイクロバスにて折尾駅へと向かい解散。次郎丸の方々ありがとうございました。



晴れた日の千畳敷（板状砂岩）

五月吉日撮影

# 第九回吟行記

平成十七年 六月十六日(木)

参加者 聖子 節子 光子 由紀子

## 宮地嶽神社

六月四・五・六日 昇先生を囲んでの「祝賀会」「夏行」を終え、すぐに送られてきた句稿を改めて読み直す。初めて参加の聖子さん。心配をよそに、先生や千種さんから東京・千葉の方々とは気負うことなく話をされていた。青葉若葉の金福寺や二尊院。夏行解散後の「哲学の道」や「お蕎麦や」騒動。句稿を手にもいろいろなことが思い出される。

その余韻の中、気がつけば「あしや句会」の定例吟行句会の日が迫っている。今月は福岡方面なので節子さんに電話する。花菖蒲の「宮地嶽神社」を予定しているらしい。以前行ったことがあるが、菖蒲池や菖蒲田があっただろうかと思いつきながら、集合場所や集合時間を聞く。

当日JR福岡駅に集合。節子さんの車が迎えに来てくれる。大宰府インターから高速を走り、今年から合併で「福津市」となった町に着く。下見してからの迎えに感謝。

駅から五分くらいの所に神社はあるが、神社に隣接した駐車場までの狭い道をぶつかりもせず運転する。当たり前のことだが、曲がれば行き止まりではないかと思うほどの道だったので、駐車場に着いたときは節子さんの運転に皆感動！駐車場から少し歩き境内に入る。以前初詣にきた時は、まっすぐな参道を通り、松ヶ枝餅のお店を見ながら階段を登って本殿へと進んだので、神社の様子が随分違うように思える。だが目の前の楼門の奥には、確かにあの日本一の注連縄の本殿がある。やはり「宮地嶽神宮」だ。驚いたことに、本殿前の境内には所狭しと花菖蒲の鉢がぎっしりと整然と並べられている。



まさしく花菖蒲の「宮地嶽神社」だ。菖蒲に引き寄せられるように楼門をくぐる。花の盛りは少し過ぎたようだが、まだまだ十分見応えがある。まっすぐに色鮮やかに花を咲かせる菖蒲は、蒸し暑い梅雨の季節に涼風を呼ぶ花だ。江戸系の菖蒲らしく、花が葉先よりすつとぬきんで咲き、細やかな色彩が目を楽しませられる。

楼門に菖蒲の花の見えてきし  
大江戸の風情銘とし花菖蒲

節子 聖子

節子さんが、光子さんを呼んでいる。「こんなん好いとっしやろ」と指差している。ガラス張りのケースの中で獅子舞の獅子がお御籤を口にはさんでいる。機械仕掛けの獅子舞は、首の傾け方が実に上手く縁起がよさそう。さっそく皆でお御籤を引くことにする。四人が静かながらも歓声をあげて引くので、後ろ



に何人か立ち並ぶ。小学生らしい男の子の目は真剣だ。今年になって何回お御籤を引いただろう。当たるも八卦当たらぬも八卦。お御籤を結ぶのによさそうな木が境内の隅にある。大きな枝を広げ、よく見るとその枝に何本も支柱をしている。色あせた墨字の「寒緋桜」の立て札。もちろんお御籤は結べないが、二月から三月にかけての花の盛りはさぞ美しいだろう。

緋色の袴の巫女が菖蒲絵の土鈴を境内で売っている。

本殿に手を合わせる。「宮地嶽神社」の創建は、約千六百年遡るといわれ、神功皇后が、三韓出兵で自ら大陸に渡るとき当地に滞在され、裏の山の頂に祭壇を設け開運を祈願して船出したという。彼の地を「宮地」といい、彼の山を「宮地嶽」という。開運、商売繁盛の神として、毎年多くの参拝客が訪れる神社である。



日本一の大注連繩の他に、日本一の大鈴、日本一の大太鼓があるらしいが、長さ十三・五m、重さ五トンの注連繩だけで十分迫力がある。五トンといえ、五十<sup>キロ</sup>の人間が百人。三年に一度注連繩の取り替えがあるらしいが、注連繩を作っているところを見てみたいものだ。お賽銭箱の手前に籠があり、その中に「花菖蒲」「筍」「てるてる坊主」などの期間限定のお守りが売られている。あれこれ迷った未購入。

宮地嶽大注連繩に梅雨じめり  
 節子  
 菖蒲絵の期間限定願い鈴  
 由紀子  
 緋袴の巫女売る土鈴花菖蒲  
 光子

本殿の裏に回る。葉桜の下を抜けていくと「奥の宮八社めぐり」の立て札がたっている。左手に赤い鳥居と赤い献灯が奥へと立ち並び、異次元への入口のように奥へと続いている。パンフレット



を読むと「七福神社」「稻荷神社」など奥の宮八社を一つ一つまわれば夢や願いが叶うとされ多くの方が訪れているという。二百年以上前に日本最大の石室古墳が発見され、それを機に八つの社を祀り、五穀豊穡、愛、平和・・・

などを祈るようになったという。今回はここを横目に右手の公園のような広場に向かう。



ゆるい坂になつてる広場は芝生だったかどうか覚えていないが、青々として神社の奥とは思えない広がりだ。北側の斜面には紫陽花が一面に咲き、泰山木が白い花をつけている。そして見えてきたのは「菖蒲池」。見物客が三々五々菖蒲の花を楽しんでいる。カメラを向けている人もいる。池には木道が通され、花殻を摘む人が二〜三人池の中に入っている。

奥宮へ灯籠続く木下閣

光子

菖蒲池定点観察カメラあり  
 聖子  
 花殻を摘む大袋菖蒲池  
 節子  
 無造作に長靴蝌蚪を踏みゆけり  
 光子  
 ざぶざぶと来て菖蒲池花柄摘む  
 由紀子

菖蒲池の向こう側には、日本の古い民家が建ち並んでいる。富山の合掌造り、福岡の鉤屋造り、熊本の本棟造りなど各地の伝統ある民家を移築した「民家村」だ。神社の中にどうしてという疑問は残るが、花菖蒲と民家の取り合わせは絵のように美しい。しばらく眺めた後、鴨のいる池を見ながら坂道を登っていく。鴨は餌のとり過ぎではないかと思うほどふっくらとしている。



軽鴨の餌百円と豆菓子に

光子

残り鴨一羽太りて襖池

由紀子

緑美しい径に節子さんと聖子さんが歌いだす。

♪夏が来ーると思ひ出す・・・♪ 高音部に合わせて節子さんが低音部を歌う。歌を歌える人はいいなと思ひながら口パクで合わせる。

ハミングもいつしか歌に夏あざみ

光子

緑陰の声軽やかに二重奏

由紀子



神社の縁を歩いていけるのだろう。坂下には菫蒲田が見える。径の脇に宮地嶽神社付属カルチャーセンター「文華学園」の看板を見つける。茶道、華道などいろいろな習い事ができるようで、英会話の教室もある。目の前の建物が「文華学園」なのかどうかわからない。入口に看板は掛かっている。て小さいながら花壇には花が咲いていたが・・・。

廃屋のように人の気配がない。場所を変えているのかも知れない。さらに先へ進むと、上から木々が覆いかぶさるような鬱蒼とした林の中に小さな池がある。今まで見たことのないような漆黒の水色。その水面を水馬が泳いでいる。それを過ぎると急に明るくなり、大きな鳥居と階段がある。なんとここは「宮地嶽神社」の正面の鳥居のある所だ。下方には人通りが少ないが門前町商店街があり、道がまっすぐ海へと下りている。

海を前背に夏山の宮地嶽  
夏海の香り満ち来る神社あり

節子  
聖子



階段を登っていく。両側には寄進されたものであろうか青銅の馬や牛の像がたっている。藤棚が見え、最初にくぐった楼門の前に辿り着く。神社の敷地のなんと広いこと。大願成就、四季折々の花、老鷹。よかところでした。

昼食は海の見えるレストラン「大力」にて「あらかぶ定食」を注文。サーファアの集まるような店構えなので、和風の食事には嬉しい驚き。ここでそれぞれ句作する。句会は場所を変えようと少し離れた喫茶店に移動する。

お手本のように老鷹ホーホケキョ  
節子  
水水みたすコップに海の色  
聖子

お店の人の好意でテーブルも広く、ゆっくり句会ができ、今日一日の吟行句会をしめくくることができました。福間駅にて解散。よかところでした。



# 第十回吟行記

平成十七年 七月十四日(木)

参加者 聖子 節子 光子 真理子 由紀子

## 博多祇園山笠

あしや句会」の吟行句会は、毎月第三木曜日(たまに第二木曜日)と決まっているので、七月の句会日は十四日となる。六月吟行のすぐあと、節子さんの「七月は山笠吟行ちゅうのは どげんやろ」という一言で即決。

七月一日の飾り山笠の披露から十五日早朝の追い山に終わる博多山笠は、例年まだ梅雨の明けきれぬ博多の町を熱くする。その山笠を句友と吟行することができると願ったり、叶ったりだ。

学生時代に四年間住み、今も時々行く博多だが、「流れがき」や「追い山」を見たことがない。「飾り山笠」の美しさだけに満足していた。特に学生時代は、祭見物より「山笠バーゲン」のほうが重要だった。

市の中心を流れる那珂川を境に西側が城下町の「福岡」、東側が商人の町「博多」。三十年前に住んだ頃は、天神界隈に人が集まり、昔ながらの博多商人の街・川端商店街は寂れつつあったような気がする。今では再開発などで、福岡市全体が良くも悪しくもミニ東京となり、マンションの立ち並ぶ街になったが、「博多どんたく」とともに「博多山笠」は、福岡市が九州の一極集中化で変貌していくにつれ大きく新聞・テレビに取り上げられている。「バーゲン」より「山笠」を楽しみたい年齢になったのかもかもしれないが、なにはともあれ七月十四日から十五日早朝は「博多祇園山笠」の最高潮の時だ。

山笠行事のあらまし

七月一日 飾り山笠一般公開(十四日夜まで)

夕方 お汐井取り(当番町)

九日 夕方 お汐井取り(全流)

十日 夕方 流れかき・流区域内

十一日 早朝 朝山・流区域内

午後 他流がき・流区域外

十二日 追い山ならし(追い山リハーサル)

十三日 集団山見せ

十四日 夕方 流がき・流区域内

十五日 早朝 追い山

十四日十時四十五分博多駅博多口「飾り山笠」前に集合。「さあ、山笠の街へ」と地下鉄に乗り、二駅目の「中洲川端駅」で降りる。地下鉄の階段を昇り、通りに出るとすぐに再開発ビルの「博多リブレイン」や「博多座」がある。その前の歩道に「十六番山笠博多レブレイン」の「飾り山」が据付けられている。「表」の標題は「三人吉三巴白浪」で、十メートル近くある山笠の上から「お嬢吉三」「お坊吉三」「和尚吉三」が見得をきっている。裏に回ってみると、ぶんぶく茶釜の狸が傘をさして綱渡りしている。標題は今発売されている玉三郎の「九月大歌舞伎」の演目と同じである。

「飾り山笠」は、毎年博多人形師によって、歴史上の人物やその年を象徴するテーマをもとに美しく飾られる。表には古典や歌舞伎などの史実を題材にしたものが多



く、「見送り」と呼ばれる裏には、子供に人気のキャラクター等を用いることが多い。博多駅の山笠は「智将義経」と「空とぶひよこ」。どの山笠の前にも椅子が並べてあり、ゆつくり見ることが出来る。横の博多川に沿って歩く。六月の海老蔵の歌舞伎公演の始まる前の「船乗り込み」で賑わった川。川の流れは静かに海側から上がってくる。

博多座と出し物揃え飾山

光子

音もなく潮上がりくる夏の川

節子

連獅子のやさしき眼飾山笠

由紀子



和風食事処「吉一」にて昼食。街中のちよつと人に教えたくなる小奇麗なお店だ。お店を出て、山笠の中心「櫛田神社」に向かう。途中見つけた老舗の博多人形のお店では、光子さん、聖子さんがなかなかお店から出てこない。呼びに行ったはずの真理子さんまで出て来ない。人形店まで戻ると、広々と奥のほうまで人形が飾られていてギャラリイのような法被を着た幼子が「オイサツ、オイサツ」と遊んでいる。昔の博多織を着た博多人形もあり一見の価値あり。お店の子供だろうか、法被を着た幼子が「オイサツ、オイサツ」と遊んでいる。

ようやくお店を出て、中洲の通りを歩く。締め込みに長法被を着た男衆が集まっている。「六番山笠 中洲流」の前に並んで記念写真を撮っている。水法被に長法被。流(ながれ)によって長法被の久留米緋の柄が違い、手拭いや襷は全流共通で役職を表すなど、今回の山笠吟行で随分物知りになったような気がする。川端通りには「八番山笠 走る飾り山」が商店街の中に飾られている。この山笠は、他の飾り山笠より少し低く、山小屋に入っていない。

い。通りのお店には、所々に臨時休業の張り紙があつたり、「山笠総代」の張り紙があつたりする。

あちこちと臨時休業山笠の町

聖子

男衆みなよき顔の祭かな

由紀子

金物も仏具も山笠セール中

真理子

山笠のものの地下足袋脚絆千し

光子

祭前若者詰所縄はられ

節子



櫛田神社の裏門に着く。提灯の下をくぐると、「山笠」と書かれた常設の飾り山笠がある。狭い境内に祭の出店がでており、ちよつと座つて「冷やし飴」を飲む。ずっと歩いてきた喉には、気持ちのよい甘さだ。櫛田神社を通り抜けて、

「追い山」見物のために予約しておいた宿に荷物を置きに行く。ネットで探した宿だが、走れば一分という近さで、参道脇にある古い数奇屋造りの純和風旅館だ。予約する時、「十四日の夜中はKBCの方達でいっぱい御座いますので、少々うるさいかもしれませんが・・・よろしいでしょうか?」「KBC?」何故かその時、韓国の旅行団か宗教関係かと思つた。

「KBC?なんででしょうか?」と聞いてしまつた。少し間があつて「放送関係ですが・・・」この旅館は山笠時の九州朝日放送の常宿という、なんと素晴らしい!

玄関の屋根の所が少し傾いている。昔ながら



の帳場や赤い緋毛氈の小さなロビー、大広間や小庭を見ながら長い廊下の奥にある階段を上り、二階の一室に通される。八畳にテレビと冷蔵庫があるが、普段は布団部屋ではないかと思うほど殺風景だ。一階の部屋はすべてKBCの会議室、仮眠室、締め込み室、メイク室などの張り紙がある。部屋は殺風景だが旅館自体は趣きがあり、外国人に人気があるのがわかる。



急遽、節子さんも泊まることに決める。三人で素泊まり一万円とは格安だ。なんといっても榎田神社に近い。荷物を置き、あらためて神社に御参りする。鳥居や赤い大きな御神灯の下がる楼門をくぐる。まず御参り。そしてお御籤。「吉」だったと思う。大銀杏から境内の方へ高く仕切りられ、中が見えないようになっていた。小さな入口から入ると土の広場があり、真ん中に「清道」と書かれた旗が立っている。周りに棧敷席が設けられている。ここが「追い山」会場という。会場準備が進められている。

### 報道の機材次々祭り前

光子

### 切り売りの冷やしメロンも参道に

真理子

境内自体が狭いので、それを仕切って使う追い山会場は、びつくりするほど狭い。実際に足を運ばなければわからないことは多い。

榎田神社は平安時代に創建され、博多の総鎮守。不老長寿、商売繁盛の神さまで、「お榎田さん」として博多っ子に広く親しまれている。本殿の右側にある鶴の口から出る水は「霊泉鶴の水」といわれ、昔から枯れること



もいて、だんだん法被姿の男衆が多くなる。通りは祭一色だ。

### 祭礼の衣装凛々しき犬も居て

聖子

### 丸き尻出して法被の祭の子

由紀子

### 明日動く山笠背に集う男衆

真理子

句会場の「リバレイン」五階のおしゃれな喫茶店。真ん中の席に陣取つての句会となったが、ウェイターは嫌な顔ひとつせず「俳句ですか？」といながら、珈琲とケーキを運んでくれる。四時から「流昇き」が始まるので、間に合うように十句出し、七句選とする。(真理子さんには吟行終了間際に十句となったことを教えるようになってごめんなさいね) 句会を終え、気持ちはこれから本番。「リバレイン」を出ると、さっきより法被姿の男衆の往来が激しくなっている。ほとんど長法被ではなく締め込みに水法被で、背中に「流」を大書きしている。男衆の集まっ



ていく方向へ付いていく。見物人も多くなっている。大通りから中に入った通りには「勢（きお）い水」と言われる水が所々に置かれている。

### 山笠の昇き手集まる昂りに

節子



「西流」の「昇き山」の周りに男衆が集まっている。どうやらここから出発するようだ。しばらく様子をみていると、だんだん静かになってくる。男衆の「祝いめでた・」の歌、その後の手締め「博多手一本」（いよーシャンシャン、まいとつシャンシャン、よーと三度シャンシャン、シャン）男衆の顔が締まってくる。

男衆も見物人も全く静かにただ時が来るのを待っている。少し離れた高台には太鼓が置かれ、秒読みが始まる。五・四・三・二・一ドーン！

### 昇山笠の一本締めの一静寂

光子

### 水浴びて博多山笠駆け抜けし

節子

勢いよく走り出す山笠、勢い水をかける人。光子さん感極まって涙顔。それほど緊張感のある「昇き山」の出発だ。他の山笠も見ようと櫛田神社の方向に向かって歩き出す。水で濡れている通りはすでに「勢い水」のかけられた通り。七つの流がそれぞれの区域を駆け抜けている。

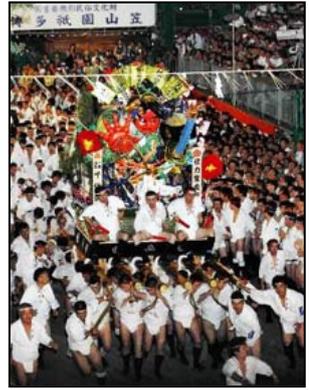
「オイサツ、オイサツ」の掛声のする通りにでる。速い！！重さ一トンもする山笠を、この速さで担ぎ手を交代しながら駆け抜けるのは難しい。それ故にこれほど真剣になるのだろう。いくつかの「昇き山」の走る姿をみて五時半ごろ解散する。



「博多祇園山笠」は、総鎮守櫛田神社の祭神のひとつ（すさのうのみこと）を祀る奉納神事。その起源や変容については諸説はあるものの一二四一年に大流行した疫病退散のため、承天寺の開祖・聖一国師が博多町衆が担ぐ施餓鬼棚に乗って博多市内をまわり甘露水をまいて祈願したことが始まりとされている。時代の流れとともに「山笠」の姿も変わっていったようだが、「昇き山」と「飾り山」の二つに分かれたのは比較的新しい。明治の中期に市中に電線が張り巡らされたことにより、高い山笠では町中を走れなくなり、この時期を境に走る山笠と豪華な装飾の飾り山笠になったという。川端通りで見たのは現在唯一の「走る飾り山」。走るのを見たいものだ。

「追い山」見物組は博多駅ちかくの「手羽屋」でホームページの「まいど」の管理者と一緒に食事。聖子さんとは初顔合わせ。今後ともよろしくね。夕食後、聖子さん帰宅。ごくろうさまでした。残る三人は宿まで歩く。

宿の大広間では何十人もの人達が放送の打ち合わせをしている。お風呂や洗面所が一階にあるので降りていくと、小部屋で休んでいる人、ミーティングしている人などいるが、静かだ。朝4時にアラームをセットして休む。一度三時ごろ人声で目がさめる。宿の中ではなく、通りから聞こえてくる声だ。窓をあけて神社のほうに目をやると、すでに人だかり。まだまだ寝ておこう。四時に起きて出かける準備をする。一階に降りるともう誰もいない。神社に着いた時は見物客の頭ばかりで山笠の通るのが見えるかどうかわからない状態。少しづつ前に詰めていく。



もうすぐ四時五九分。「祝いめでた」の歌が聞こえる。いよいよだ。秒読みがはじまる。そして太鼓の音。

一番山笠は今年「千代流」。ウオー！

次々に「流れ」が櫛田入りしてくる。雄叫びとタイムを発表する声、そして歓声。

まだ明けきらぬ空に怒濤のような声が響く。早くから来ている人が一人二人と帰っていくので、その間を縫って前に行く。最後にあの「走る飾り山」が走る準備をしている。飾りの中央にいる虎の口から白い煙が吐かれている。

櫛田入り雄叫びあげて山笠走る

廻りつつ煙はく虎飾り山笠

光子

節子

走り終えた境内にはまだまだ人が多く残っているが、櫛田神社を回った山笠は承天寺や東長寺を周り、リブレインの「追い山廻り止」まで行くので、それを追いかけていく人もいる。だんだん明るくなった街には区域に帰ってきた山笠が商店街の中をまわっている。その後は車の通行止めになっていた通りも解除され、また普通の街に戻っていく。



櫛田神社では「山笠奉納鎮め能」が格調高く静かに執り行なわれている。鼓の音がつい先ほど終わった追い山の熱気を鎮めるが如く境内にひびく。まさしく「飾り山」の「静」

で始まった山笠行事が「昇き山」の「動」となり、そして再び「能」の「静」へと戻る。その一部始終をみることで、「山笠があるから博多ったい！」を実感する。

祭果て鼓の響く鎮め能

由紀子

神社帰りにはKBCの上野敏子さん（ピンキー）や宿の玄関では草柳アナウンサーに遭遇するなどうれしいこともあり、なかなかの一泊二日の吟行句会でした。その後の光子さんのタフさには脱帽しました。が・・・。  
皆さんお疲れさまでした。



櫛田神社 祭神の御神紋

# 第十一回吟行記 平成十七年 八月十八日(木)

参加者 聖子 節子 光子 由紀子

## 関門海峡クルーズと門司港レトロの黄昏

今年の夏も厳しい暑さである。空梅雨傾向のまま八月となったので、この暑さは一段と体に堪える。お盆明けの十八日が吟行句会日。

吟行するととなると、冷房の効いた建物に逃げ込むか、暑さを避けて陽の沈んだ頃にするしかないかと吟行地を探す。光子さんお薦めの「門司港レトロ」を候補地にあげる。「門司港レトロ」は吟行地として最適ではあるが、聖子さん、節子さんの住んでいる大野城や春日からでは、片道二時間近くかかるのがネックである。が今では北九州を代表する観光地の門司港。クルージングや海に沈む太陽を見ることができれば、暑さも時間も忘れるのではないかと、句会前日に「関門海峡クルーズと門司港レトロの黄昏」と銘うって予定表をメールする。

十八日十四時三三分門司港駅集合。間違って一時間も早く家をでてしまった理由を夏バテのせいにして、駅で皆を迎える。

イタリアのテルミニ駅を参考にしたという大正三年に造られた駅舎は、美しいルネッサンス様式で重要文化財になっている。改札口をでた瞬間から大正時代の雰囲気だ。「切符売り場」「待合所」を横目に駅舎をでると、駅前広場は地面から噴水が上がり、小さな子供たちがびしょびしょになりながら遊んでいる。見守っているお母さんたちも楽しげだ。何台かの人力車が客を待っている。真っ黒に日



焼けした人夫が若い女性二人に声をかけている。そばを通る私達とは視線が合わない。



十五時出港の「海峡クルーズ」に間に合うように足を早める。駅前に大きく「日本郵船」と書かれた白いビル。その先に「旧大阪商船」のオレンジ色の外壁が見えてくる。中はギャラリィとなっているので見学するのもいいが、十五時が最終クルーズ。切符売り場に急ぐ。十四時五〇分から乗船という。小さなボックスのような発券所で切符を購入していると、横の「跳ね橋」がもうすぐ上がり始めると放送がある。目の前には関門海峡、対岸には下関、関門橋、巖流島。これから五分のクルーズ船「ボイジャー」の遊覧がはじまる。団体客がいないので、ゆっくり二階席に上がる。「ボイジャー」は丸いUFOの形をしているので、席は皆窓際だ。デッキにでて風にあたることもできる。

炎昼に跳ね橋重く上がりたる  
水脈白く残して夏の船は行く  
由紀子  
聖子

出港した船は、波しぶきを上げて進む。乗客はしばらく窓越しにみているが、そのうち一人、二人とデッキに出て行く。潮風特有の少し肌にはりつく風ではあるが、思いのほか速く走り、そのスピード感が気持ちいい。関門橋の橋桁の下には、神事で有名な「和布刈神社」がある。それらしい神社が小さく見えてくる。もともと小さいのだが、船上からでは殊更である。船



下の渦巻く潮に見とれる。あちこちに渦ができ、潮流は速いのに動かない箇所があったり、見て飽くことがない。この辺りは「早瀬の瀬戸」と呼ばれ、潮流は潮の満ち干によって速くなったり、遅くなったり、流れる方向が変わったりする。船舶は皆海岸に設置された信号や海に浮かぶ航路標識を確認しながら航行する。橋の近くに E4↓(西から東の流れ・4ノット・潮流がだんだん遅くなる)と大きく信号がでている。

ここにまた渦を作りて秋の潮

節子

湧き上がり吸い込まれゆく秋の潮

光子

海峡の渦のぞきこむ秋暑し

由紀子

速い潮流に、丸い遊覧船は独楽のように流れて行く。満珠・干珠の小さな二つの島の手前で下関側へと方向を変える。ここが壇の浦だ。この潮流の変化を利用した「壇ノ浦の合戦」が平家滅亡へとなる。

秋の潮深き色なす壇ノ浦

聖子

下関側の赤間神宮(安徳天皇祀る)や唐戸市場・カモンワープ・海響館(水族館)を眺めながら船は流れに逆らって西の方向へと進む。海響館を過ぎ、三菱重工のドックあたりに「巖流島」がある。半分は三菱重工、残り半分が下関市が所有しているという。大河ドラマ「官本武蔵」の放映で、巖流島は以前よりきれいな公園として整備されている。ここを眺めながら船は遊覧を終える。

五十分は長いと思った遊覧も、乗ってみるとあつという間だ。「関門海峡の眺めは海からが良い」とある作家が言っているが、確かに間近に迫る海峡沿

いの山並みは緑濃く、空と海を抜けていく風に吹かれながら港町を眺めるのは、ひと時旅人の気分にしてくれる。

ゆるやかな坂や残暑の港町

節子

海峡の潮流変わる法師蟬

由紀子



遊覧船から降り、今は通行可の「眺ね橋」を渡り「門司港レトロ展望室」へと行く。黒川紀章氏が設計した高層マンション「レトロハイマの三一階にある展望室は全面ガラス張りの開放的なフロアで、三六〇度門司港を見渡すことができる。東側には「和布刈公園」が見え、「めかり山荘」や「平和パゴタ」が同じ目の高さだ。その先に周防灘が広がっている。眼下には屋根

に「出光美術館」と大書きされた大正期の倉庫を改装した美術館がある。西側には門司港駅を中心にした街並み、「レトロ街」と呼ばれる大正期の建物や「海峡プラザ」「門司港ホテル」などが船だまりの周りに建ち並ぶ。新しくできた「海峡ドラマシップ」が少し離れた所であり、巖流島、本州の彦島、そして響灘と続く。珈琲を飲みながらしばらく海峡の町を眺める。レトロとは程遠い近代的なこのマンションは生活臭が全くなく、この景色を毎日見ながら暮らす住人はどんな人だろうかと思う。地上103メートルからの眺望はすばらしい。

展望室より下り、隣接の「国際友好記念図書館」に入る。帝政ロシアが中国(大連)に建設



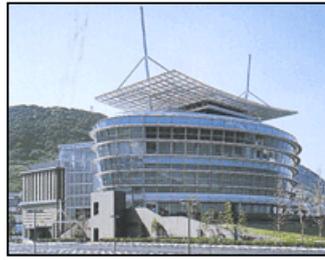
した東清鉄道オフィスを、北九州市と大連市の友好都市締結十五周年を記念して複製建築したもので、一階は中華レストラン、二階三階は図書館や資料展示室になっている。本や文献は中国を中心にしたものだ。小部屋には絵本も置かれている。

日盛りの図書館の窓外は海

光子

図書館のてすりの点字秋立ちぬ

節子



ドーム窓と呼ばれる小窓のそばには本を読むための机や椅子や灯りがある。座ってみる。外は海。一人読書するというより、なにか秘密の話をするような雰囲気だ。低い三角天井に、そこだけ奥まった空間がそう思わせるのだろう。

一七時すぎになったので、少し離れているが予定の「海峡ドラマシップ」に歩いて行く。ここでは「義経展」が催されていて、パネルや人形の展示、立体的な映像など楽しむことができるが、閉館時間に近づいたので、「海峡レトロ通り」のみを見学する。

門司港に実在した大正時代の建物や路面電車を復元し、当時の人々の風俗を再現したゾーンだ。「バナナの叩き売り」をする人見る人。日本髪を結った女性、銀行の前で話している男性。セメントらしきもので作られた人形は、薄暗い通りに実物大に立っている。買い物コーナーもあり、「竹下夢二」グッズ、「鶴太郎」グッズ、ガラスのアクセサリーなどが売られている。

ここで夕日をみながらの食事、句会の子



定だったが、来るときの怪しげな雲が気になり、駅に近いお店に変更する。実際来てわかったことだが、ここから見る八月の夕日は海に沈まない。対岸の彦島に沈む。外にでてみると時折遠くより雷の音がする。閉館間近の駐車場は広々として車はわずか。岸壁には船が何隻も繋がれ、先程の遊覧船「ボイジャー」も繋がれている。警戒船と書かれた船が横付けされているが、巡視艇とは違うのだろうか。四国の松山や対岸の下関行き連絡船乗り場を通り過ぎる。

警戒船万寿と書かれ港秋

節子

夕風を関門渡船出てゆきし

光子

気がつけば鳴く声間遠く秋の蝉

聖子

「海峡ドラマシップ」から第二句会場の「海峡プラザ」へと移動する。雨粒がぼつりぼつりと落ちてくる。五百メートル近くあるうか、それ以上に遠く感じる。節子さん、由紀子は海側のプロムナードから駅の見える所まで小走りに行く。聖子さん、光子さんを待っている間、何気なく横の建物に目をやると、「港町九番」と書かれている。町名が「港町」なのだ。



八月の午後六時はまだまだ明るい、夕立雲の出てきた港は少し薄暗い。「海峡プラザ」の中にあるバイキングレストラン「アレクタ」に入る。広い個室のような喫煙席のほうに、まだお客がいなく句会ができそうだったので、一番手前の端のテーブルを陣取る。とりあえずテーブルいっぱい料理を並べ、それぞれ好きなものを食べる。帰りの電車の時間が

あるので、食べながら句作し短冊に書いていく。今月は吟行した景色や思いを心に仕舞い込んで、三句出しとする。おしゃべりとバイキングの食事と句会とであわただしく時間がすぎたが、句会とそれぞれの選評など、やはり俳句でしめることができるかと爽快だ。あと何分といいながら外にでると、まだ夜になりきっていない空に、雨に濡れた門司港の灯りがつきはじめています。

地ビールのネオン港の黄昏に

光子

ほつほつと夕立去りたる港の灯

由紀子

静かなるネオン灯り秋涼し

節子



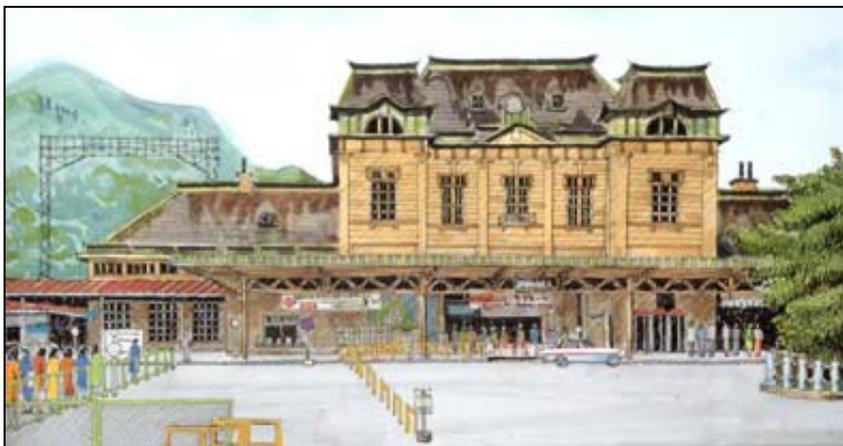
門司港ホテル前の船上レストランのネオンが灯り、涼しくなった広場は、昼間と違った港の顔をしている。

「門司港レトロ」は今年で十周年。観光地として脚光をあびる前の門司港は、関門トンネルの開通や近隣の港の整備などで衰退し、明治から昭和初期の大陸貿易の基地として栄えた頃の建物が点在する斜陽の港町だった。駅は鹿児島線と日豊線の始発駅ではあるが、北九州の中心が小倉となり九州の玄関口にはならず、どこか忘れられた町のような気がしていた。北九州市が「門司港レトロ」再開発事業を推進したおかげで、今では北九州一の観光スポットだ。門司港駅の向こうには山々が暮れていき、街の灯りが涼しげに山に張り付いている。その上に月が丸くあがっている。

門司港の駅舎にかかる夏の月

光子

北九州の良さを実感した一日となる。予定の電車に乗り込み小倉まで行き、節子さん、聖子さんは特急に乗り換える。解散。

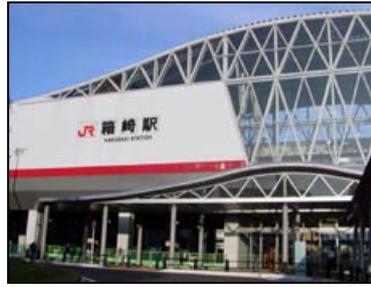


門司港駅（出典：森 惣介著 駅のスケッチ）

# 第十二回吟行記 平成十七年 九月十五日(木)

## 管崎宮「放生会」(ほうじょうや)

参加者 聖子 節子 光子 由紀子



九月十五日十時光子・由紀子に乗せた電車は新「箱崎駅」に着く。改札口に節子さんが手を振って待っている。聖子さんはまだだと言う。

去年三月香椎駅よりに移転された高架の駅は、シンブルで広々としている。しばらくして聖子さんが現れる。早く来ていたらしいが、知り合いのクリーニング屋さん顔に顔をだしてきたという。揃ったところで管崎宮へ。が構内の奥に「業務用スーパー」と書かれた店舗があるので、どういいうスーパーなのか興味深々で入ってみる。野菜や果物の生鮮食品など普通のスーパーと変わらないようにあるが、価格が安い。つい二リットルのペットボトルを買ってしまいそうだ。三十八円の缶コーヒー一本購入。

旧「箱崎駅」は駅を降りれば、すぐ目の前に管崎宮の裏門があったのだが、新駅からは五分ほど歩く。裏門の鳥居をくぐり、こんもりと薄暗い石畳の参道を歩くと急に神域に足を踏み入れた感じがする。三十八円コーヒーに喜んでいた我が背中がピンと伸びる。

今月の吟行は、博多の三大祭りのひとつ管崎宮「放生会」。毎年九月十二日〜十八日に行われる。管崎宮は宇佐神宮(大分県)・石清水八幡(京都)と並ぶ日



本三大八幡のひとつで、「放生会」は千年以上続いている行事だ。「梨も柿も放生会」と博多っ子たちの生活に深く根ざし、秋の訪れを告げる。本殿の表側にまわると太鼓の音が響き、ちょうど「放生会大祭」が執り行われている。薄い御簾越しに二人の巫女が舞を奉納している。楼門より本殿に入り、より近くに神事を見学する。



御簾ごしの神事の舞や放生会 節子  
 巫女二人神楽舞台に放生会 光子  
 厳かに菊花捧げて巫女の舞う 聖子



笙や笛を吹く雅楽隊の後ろに氏子や大祭関係者たちが椅子に座っている。宮司たちが次々に参拝し神事が滞りなく行われている。この地で生まれ育った節子さんにとっては産土神である。神事が身近かに感じられる。本殿の回廊には生け花が並べられ、和紙のぼんぼり献灯が飾られている。

福岡の知名士約七十人によって書かれているもので、県知事「麻生渡」の達筆な字で書かれた献灯。(何と書いていたか忘れたが)「再起」の若々しい二文字は福岡アビスパ。ひとつひとつ見ていくと面白い。

本殿を巡るぼんぼり放生会 節子



本殿のお札所横に、チャンポン・おはじきがガラスケースや額に飾られている。チャンポンの展示は今回初めてだそう。普通は巫女さんたちがひとつひとつ絵付けするのだが、福博ゆかりの方々（長谷川法世さんや王監督など）に絵付けをお願いしたというチャンポンや、チャンポン製作者小川勝男さんの作った珍しい形のチャンポン約四十点が参拝の人々の目をひいている。おはじきは、毎年テーマにそって三十種類が博多人形と同じ行程で作られているが、ここ何年かのおはじきがそれぞれ額に入っている。去年は「オリンピック」、今年は十月オープン九州国立博物館にちなんで「古代のロマン」。これらは放生会名物で、初日十二日八時からの販売に前日から並ぶという。

### 縁起物土のおはじき放生会

光子

ゆっくり見てから、恒例の「おみくじ」をひく。みくじの中の縁起物にはいろいろあるが、「吉」のみくじに「敵国降伏」の額がはいっている。この物騒な言葉の額は菅崎宮の楼門に掲げられている。蒙古来襲の折、龜山上皇が国難を救おうと祈り書かれたものを、桃山時代に拡大模写したらしい。説明書きには「自分にすぐれたる徳をそなえていれば、おのずと皆が従うであろう」という意味をしめしたものとある。「敵国降伏」だけだと、そこまでの深い思いはわからない。大事に財布に入れる。楼門を出ると、「ご神木「菅松」(願掛けの松)があり御籤を結ぶ。横にまたお札所。ここの御籤は「当たり」付き。



### 宮の秋鳩笛当たるみくじかな 楼門の大屋根秋の日の中に 由紀子 節子



菅崎宮は歴史ある神社だけあって、現在の本殿、拝殿は大内義隆、楼門は小早川隆景によって建立され、黒田長政が一ノ鳥居を寄進、千利休が石灯籠を奉納したとある。それぞれ国指定重要文化財となっている。文化財以外にも、蒙古軍の船が使っていた「碇石」、触れると運が湧き出る「湧出石」などもある。迷わず「湧出石」に触れてみる。簡単に届かないようにしているのか、柵から身を乗り出さないと届かない。境内からまっすぐお潮井浜にのびる長い参道には、露店がびっしり軒を連ねている。「残念！」と言いながら参道脇の小道にはいる。路地を曲がりながら食事処「梅嘉」に行く。私たちが席に着いた後から次々にお客が入り、あつという間に満席になる。安くて美味しいので人気があるのだろう。参道からどのくらい歩いただろう。五十分くらいだろうか。節子さんの案内に町を迷うことなく歩くことができる。歩くことで町の様子がわかる。お父さんが通ったという小学校の校門のレンガ造りは町の歴史を感じさせる。古い家並みを残す路地には何本か石榴の木が植えられ、ふうせんかずらや萩の花が風に揺れている。



路地裏のふうせんかずら秋の風  
光子  
古町の路地にたわわのぎくろの実  
由紀子

昼食を済ませてまた参道へと戻る。七百軒もの露店には、「射的」や「りんごあめ」「いか焼き」「バナナのチョコがけ」「東京ケーキ」など、昔懐かしいものから最近流行りのものまで国際色豊かに並んでいる。マイヤン（タイ）・タコス（メキシコ）・シシカバブ（トルコ）や佐世保バーガーといった具合だ。

シシカバブ並ぶ露店や放生会  
聖子  
いか焼の匂う参道放生会  
節子



参道横の広場にも露店や屋台が並びその奥に「お化け屋敷」がある。露店の灯りで秋祭りの雰囲気がいっそう引き立つ夜の放生会には「お化け屋敷」にも人が集まるだろう。覗いて見る。見覚えのあるお化けたちが元気なくいる。見世物小屋、金魚釣り、沢がに釣り。全部見て回れないほど並んでいる。

ここにも「チャンポン」や「おはじき」が売られているが、管崎宮の数限定のものとは違うように見える。

秋祭りお化け屋敷の休む昼  
由紀子  
無造作にお化け置かれし秋祭  
節子  
金魚つり店番居眠り放生会  
聖子  
放生会夜店にカニや金魚つり  
光子



もうひとつ放生会ならではのものに「新生姜」がある。茎がまつすぐにのび、緑の葉先がピンと尖った新生姜。新生姜のみを束ねて売っている露店があちこちに出ている。何故新生姜がこれほど売られているのか？何故

「放生会名物 新生姜」なのか？調べてみると、昔管崎宮周辺には生姜畑が多く放生会土産として売られ、買った人は「今年も放生会に行ってくださいよ。」と隣近所に配っていたという。放生会が来ると単衣の季節になる。年に一度の放生会詣りに博多の女たちは、競って晴れ着を新調する。「幕出し」のあった大正の末くらいまで、呉服屋の売り上げ六割が放生会着物（ぎもん）で占められたそう。放生会ぎもんをかうてやりさらんとは男の恥」・こんな言葉があるくらいだ。そこで「今年も女房子供に着物を着せて放生会詣りして来ましたよ」ということになる。亭主の甲斐性と新生姜。

葉の繁り見事な生姜香りけり  
聖子  
新生姜束ね出店のあちこちに  
由紀子

参道沿いにある「神苑花庭園」に入る。中にあるレストラン「迎賓館」にて句会。ケーキセットを注文して句を短冊に書いていく。運ばれてきたお皿には何種類かのデザートがのっている。期待以上のケーキセットに歓声を上げながらも、二時三十分には昼の部はクローズというので、速書きで清記と選句をする。後は屋外のテーブルで句会を続行する。休み時間になったレストランの従業員の明らかに呆れ顔を、横目で楽しみながら披露、選評をする。「句会はどんな所でもできる」こ

とは、〇三年の湖北夏行で経験済みだ。吟行途中に、小学校の校門に掲げていた標語の中の「君が見えない」をいれた句を、十句以外に一句作ろうということになっていたので出してみると、三句はびっくりするほど同じ。違う句が光る。

人混みてきみが見えない放生会

人混みに君が見えない放生会

人波に君が見えない放生会

背合わせのきみが見えない秋の月



句会終了後「花庭園」内を回る。花の少ない時期だが、大きな瓢箪に驚かされ白い彼岸花（リコリス）が美しい。秋の七草「萩」「桔梗」などの山野草も植えられている。一回りして庭園を後にする。空を見上げると秋らしいすじ雲が浮かび、その中を一直線に飛行機雲が走る。

先に行く人待ってをり大瓢

節子

音もなく葉裏を見せて萩は揺れ

聖子

矢印に従ふ白き曼珠沙華

由紀子

いつの間に雲はすじ雲秋めいて

光子

参道から本殿のある境内に戻る。特設舞台では演芸奉納が行われている。舞台の奥に絵馬殿があり、合戦絵図の大燈籠が四方に掲示されている。見事なものだが、演芸を奉納する人達の控え室兼更衣室のようになっているの、ざっと見て出る。



もう一度お札所に行き、始めに見た「おはじき」が気になり、迷いつつ額入りのものを光子さんと購入。（光子さんは迷わなかったかも）時間が経つにつれ「古代ロマン」のテーマも良いし、前日から並んで箱入りの「おはじき」を買う元気はないし、飾るとしたらやはり額入りだと納得する。並んで整理券の配布を待つほど人気のある「放生会おはじき」は、昭和五四年に始まり、年毎のテーマ決めも平成五年からという新しい名物だという。お宮が氏子に配る以外の一〇〇前後の限定個数のための人気もあるだろうが、ひとつひとつの図柄が微笑ましい。（お宮で額入りのものを特別頒価で配るようになったのは最近らしい。）

本殿に再度手を合わせ、駅へと向かう。路地を抜けて大通りへでると新箱崎駅が見える。新駅建設のために、辺りいったいは取り壊され広い通りになっている。以前の古い小さな駅舎と渋滞解消から歓迎されている新駅だが、辺りがマンションばかりの町にならないことを望む。近くの九州大学の移転が順次進められ、箱崎の様子もこれから少しずつ変わってくるだろう。箱崎宮を中心としたこの懐かしい町の匂いは、いつまで残っているだろうか。

新しき駅秋風の吹き抜けて

節子

楽しい一日でした。ありがとう！駅にて解散。

# 第十三回 吟行記

平成十七年十月十三日(木)

参加者 聖子 節子 光子 由紀子

## 皿倉山山頂

十月の吟行地は皿倉山。十三日朝、快晴というほどではないが、うつつらと雲のかかる空は穏やかで、予定通り山頂まで登ることにする。

十時三十分八幡駅に集合。ほぼ正面に位置する皿倉山に、駅前からタクシーに乗り「帆柱ケーブル山麓駅」へと直行する。大通りから住宅街に入るが、急な坂道となっている。ここ八幡東区は八幡製鐵所のお膝元。従業員数が四万人を越えていた昭和四十年頃まで次々に建てられた住宅が山の上まで続く。急坂を離合する車に注意しながら上ると、まだ紅葉していない桜並木の奥に、こじんまりと「山麓駅」が建っている。駅から車で五分の距離だ。

どこの町でも、その町の「顔」となる山や川があるが、皿倉山(標高六二二m)は百万都市北九州の「顔」である。市内の山では最も高く、豊かな自然は市民の憩いの場所になっている。皿倉山、帆柱山、権現山などからなる帆柱自然公園は、動植物の宝庫で、観察会など四季を通じてイベントも多い。皿倉山頂までは、舗装された登山道路を車で上ることもできるし、のんびり



景勝を堪能しながら帆柱登山道を歩いて登ることもできる。

今回は、ケーブルカーとリフトに乗って吟行予定。二〇〇一年開催の「北九州博覧祭」に合わせて新装されたケーブルカーは、最新鋭のスイス製の車両で、「はるか」号「かなた」号と命名される。全面ガラス

張り、回りの景色と段々遠ざかる町の両方を見ることが出来る。今日は特別なイベントもない日なので、乗客はわずか。運転手の横に四人並んで座る。ケーブルカーを占領し秋の山へと上



つていく気分は、このうえなく心地良い。全長一一〇メートル、標高差約四四〇mを五分で着く。「山上駅」に着くと、出口には「花みくじ」が置かれており、広場は展望台であり、花壇には小菊など秋の花がきれいに植えられている。前方左に歩いていくと階段があり、その上がり口に「雨情詩碑」がある。

「洞(くき)の海辺の 船もよい 船も帆がなきや 往(ゆ) かねない お供についた クマワニが 山で帆柱 伐りました その時代った帆柱は 帆柱山の 杉でした」

この歌は昭和7年野口雨情が皿倉山で作り、森繁久弥の歌で発売されたそう。詩碑の前では毎年「雨情忌」が開かれている。

階段を上っていくと、このまま山頂に行きそうなので引き返す。リフト乗り場を駅員に聞くと、ケーブル駅の脇にあるという。リフトにすぐ乗らず、右手に見える「山の上ホテル」の方へ歩いて行く。途中フィールドアスレチックの遊び場があり、好奇心旺盛な光子さんが、スイーとロープにぶら下がる。こんな時見ているだけでは面白くないので、節子さん、由紀子、聖子



さんと皆次々とぶら下がる。手を放すタイミングを教えられ無事着地。子供たちがまだ小さく、家族で一緒に遊んだ頃を思い出す。木々は色づきはじめている。少し風がでてきたようだ。空を見上げると、頭上を雲が飛ぶように流れていく。

早送り画像のごとく秋の雲

節子

秋山を流れる雲の早さかな

光子

山頂の雲急ぎ行く花ススキ

由紀子

国民宿舎「山の上ホテル」が見えてくる。レストランの「営業中」にホッとす。山頂で弁当を食べるのもいいが、レストランの暖かい食事はありがたい。この国民宿舎も来年の三月で閉じられるという。老朽化は否めない。

春来れば閉じる山宿いわし雲

由紀子

廃業の決まりし宿舎薄紅葉

節子



客は私たちのみである。窓際の席に座り、ハンバーグ定食やお蕎麦などそれぞれに注文する。十月になっても暖かい日が続いているが、さすがに山の上では暖かいものが美味しい。ガラス越しに秋の草や木々を眺める。ハンノキかヤシヤブシが実(果穂)をつけている。その下には水引の花や蓼などの秋草が茂っている。ふらりと一匹の蝶が横切る。アサギマダラだ。志賀高原でみたアサギマダラが皿倉山でもみることができるとおもっていいこと。こんな時動植物に詳しい人がいるといい。東京の虫や草

花の詳しい典子さん裕子さん温子さん等、そして九州の節子さん、後ろに付いて行くと自分も物知りになった気がする。

秋蝶に一瞬視界遮られ

聖子

ふうわりとあさぎまだらの秋の風

節子

化粧室に行きもせず、そっと口紅をひいた由紀子を見逃さず句を作る。節子さんも口紅をひいたのだろうか。

目のすみに秋の蝶見て紅をひく

節子

「山の上ホテル」を出ると、下方に「皿倉音楽堂」が見える。よくイベントの集合場所になる所だ。今日はこれ以上下へは降りず、リフトに乗って山頂に行くことにする。途中先生に引率された三十人くらいの小学生の集団とすれ違う。道々他愛無い話をしながらゆるやかな坂道を登っていく。通草か郁子か、ようやく手の届く所に実をいくつもつけている。実が割れているので通草だろう。雲は流れ行き、青空が広がっている。アサギマダラが、ふわりまたふわりと姿をみせては消えていく。



言い訳の話も楽し秋晴れて

光子

秋蝶のふらり谷よりまた谷へ

由紀子

郁子通草いずれにしても秋の山

聖子

あけびの実晴れたる山に割れにけり

光子



リフト乗り場は、ケーブルカーの乗り場横の出口を  
 だとすぐにある。「山上駅」の駅員は一人か二人し  
 か見当たらない。リフト乗り場にも係員は一人で、  
 作業員らしき人が行き来している。止まっていたリ  
 フトは私たちが行くと、係員が動かす。リュックを  
 前掛けにしてリフトにしがみつくと、宙ぶらりんな  
 った足元は、不安定ながら空中散歩しているがごとくだ。ススキの群落が美  
 しい。

客乗れば動くリフトや秋の山

節子

客去れば止まるリフトや秋の山

節子

天高し浮きしリフトの宙になを

光子

山頂に着く。出口にある市民ギャラリーの建物をのぞく。写真家の撮った美  
 しい景色や草木の写真が展示している。この写真もいいが以前展示していた  
 「皿倉山の動植物」を見たかった。「山上駅」の木々の中にいた小さな鳥の  
 名前もわかったかもしれないのに。建物の前に小さ  
 い植物園らしきものがあり、ハバヤマボクチ、ゲン  
 ノシヨウコ、ミズヒキソウ、ワレモコウ、カワラハ  
 ハコ、ヤマジノギクなど秋の草花が咲いている。地  
 味ながら風情のある花ばかりだが、盛りは過ぎてい  
 る。少し坂を上がって展望台より北九州の街を一望  
 する。若松や八幡・戸畑の工場群・スペースワー  
 ルドの観覧車・メディアドームの銀色の屋根・門司  
 の風師山などひとつひとつ指差していく。真正面に



ススキ原が下へとひろがっている。時折リフトの動く音が聞こえてくる。  
 ここから眺める景色は美しいが、さらに夜景は北九州市自慢のひとつ  
 で、以前は「百万ドルの夜景」と言われていたのに、それでは足りず  
 「百億ドルの夜景」と値段が高騰している。

絵の如く動かざる船秋の湾

聖子

正面に風車よく見え秋の山

由紀子

秋天に草刈る音の響きけり

光子

周囲を四々五人の作業員が草刈りをしている。草刈機の四々五台の音は  
 すぎまじく、刈った草が宙に舞い、早々に展望室に入る。熱い珈琲を注  
 文し句作、句会。ソフトクリームで締めくくる。展望室から出て、反対  
 側のテレビ塔寄りの南方面を眺めると、福知山を中  
 心にした峰々が続く。河内の貯水池も見える。薄紅  
 葉の山の中に静かに満々と水をはらせている。山頂  
 には「九州自然歩道の原標碑」・珍しい「昆虫碑」・  
 北原白秋の詩碑などもある。それを見ながら東側の  
 自然歩道を下りていく。だんだん足場が岩になり急



に視界がひろがる。岩の先端には「国見岩」の石標が立っている。

下をのぞくと断崖絶壁で足がすくむ。山頂に負けず劣らず、市街一望の場所だ。国見は、昔の支配者が高い所から国情を視察したところで国見名は各地に多い。現在ここではロッククライミングの練習がされてるといふ。聖子さん、光子さんは高所恐怖症ではないようだ。崖の先端から下を覗き込む。



山頂の崖に立ちみて秋惜しむ

由紀子

来た徑を戻る。名前はわからないが黄色の花が道辺に咲き、サルトリイバラの実が色づきはじめている。リフトに乗り、さらにケーブルカーにて「山麓駅」へと下りてくる。ここにもアサギマダラがふわりと姿をみせる。

秋の蝶リフト下りゆく足先に

節子

落葉積む軌道を山のケーブルカー

光子

「山麓駅」の駅舎の中に北九州の俳句グループの句が貼られている。八月末の吟行句だ。四季折々に楽しむことのできる山だが、残暑厳しい季節にもこうして集い俳句を作っている。山頂での三十句以上の秀句を一読する。雨情や白秋も登り歌詞を書いた皿倉山。北九州のシンボリックな山だからであろう。白秋の山頂にある詩碑「鉄の都」(一部分)にはこ



う歌われている。

「たかる人波 さすがよ八幡 山は帆ばしら 海は北 船も  
入海 洞の海」

余談だが、白秋は北九州関係の歌や詩を八編も作っている。「製鐵所所歌」「製鐵所運動競技応援歌」などもある。「所歌」や「応援歌」は全従業員から募集し、その選者として招かれた白秋だったが、気に入ったものがなく、現在の「高見倶楽部」に泊まって自ら作詞したといふ。

昭和五年(一九三〇年)のことだ。製鐵所と皿倉山、どちらも北九州のシンボルだ。

「鐵なり、秋(とき)なり 時代は鐵なり 高鳴れ、この腕、  
世界の鐵腕」(所歌の歌いだしの部分)

「山麓駅」にタクシーを呼んで「八幡駅」まで戻る。時刻表を見ると、ほとんど待ち時間なしで電車に乗れそうだ。光子さんは小倉方面に用があり上り電車に二三分しかない。挨拶もそこそこに、其々上りと下りのプラットホームへと向かう。私たちが階段からプラットホームに上ったと同時に、上りの電車が発車する。そこには光子さんの姿はなかった。サツと片足でも電車に入れて乗り込んだのだろう。解散。折尾すぎてから聖子・節子さんは虹を見たらしい。今日のよき日の締めくくりとなったようだ。

# 第十四回吟行記

平成十七年 十一月十七日(木)

参加者 聖子 節子 光子 由紀子

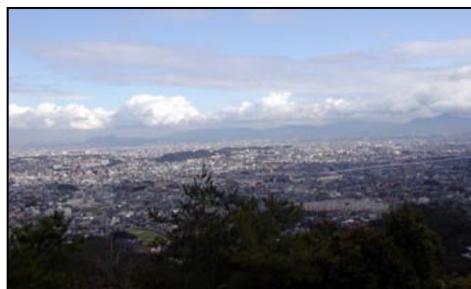
## 油山市民の森 油山観音正覚寺

「杞陽忌」の旅の余韻がまだ残る十一月の第三週。福岡市の「油山市民の森」の中腹にある「油山観音」を吟行する予定と節子さんより連絡がある。紅葉の美しいこの時期、吟行地に大宰府などを候補にあげていたようだが、十月開館の「九州国立博物館」を訪れる人が多く、周辺は混雑しているらしい。先月の皿倉山が北九州市民に親しまれている山であるように、油山(五九七m)は福岡市民に親しまれている山。キャンプ場や自然観察センターや観光牧場などがある。そこに「観音様」が安置されているとは知らなかったが、晩秋の山歩きは楽しみだ。

十一月十七日十時五分大野城駅到着。いつものように節子さん、聖子さんが車で迎えてくれる。このところ足腰が万全でないという聖子さんだが、いつもの聖子スマイルにホッとすする。「大野城駅から油山へは少し時間がかかるが、田園風景や紅葉を眺めながらのドライブも吟行と思っつてね。」と節子さん。車窓から見る景色はのどかな晩秋の里山だ。市街から離れるにつれ、櫛田や冬野菜の畑などが多くなる。その行く先々の風景の中にアクセントのように柿の実がたわわに熟れている。途中「いのしし出没中」の看板を見つめる。山道に入る。山道といっても鬱蒼とした木々の中を通るのではなく、所々紅葉の混じるなだらかな坂道で、快適なドライブコースだ。福岡市にはいつているのだろうか、人家が多くなり交通量も多くなる。後部座席に座っている二人は、初めての道にあつちを見たりこつちを見たり。油山の入口はもうすぐのようだ。

いのししが出没中と知りながら  
山柿のたわわや道に迷いけり

節子  
光子



所々黄葉紅葉で色づき、地面には落葉が散り敷いている。巡回中のパトカーが展望台をゆっくり一回りして、また下りていく。

見下ろして見上げて山の紅葉かな  
冬ざれの町に機影の降りてゆく

光子  
由紀子

少し坂道を下り「油山観音」へと向かう。山の中腹にしては広い境内があり、ここからも市街地が一望できる。福岡の街を見下ろしながら境内にある「幸福の鐘」を撞き、「ひばり観音」にお参りする。「ひばり観音」のご神体は、もちろん「美空ひばり」さん。福岡市在住の彫塑家





が、平成三年に石膏像でつくり法要し、平成四年に青銅像で完成させ一般公開したものだ。百円入れると、ひばりさんの歌が流れる箱があるのが、良いような悪いような何とも言いがたい気持ちになるが、一時は福岡市内の病院で快方に向かわれたひばりさん。五二才の若さで亡くなったひばりさんが観音様となり福岡市街地や博多湾を毎日眺めていることを思うと、「幸福の鐘」の音も心に響いてくる。

山側の一段高い所に紅葉に囲まれたお寺が建っている。今日のハイライト「油山観音正覚寺」。寺伝によると、奈良時代、清賀上人が日本に渡ってきて（インド、中国からの二つの説）荒津の浜から上陸して山に登り、その山に茂る白樺に千手観音を刻んで安置し寺を開いたといわれている。また日本で始めて椿の実から絞った油による灯火の法を開いたといわれ、これが油山の名の起りになっている。

その後多くの寺院（その数三六〇）が建ち、九州の仏教文化の中心となつて栄えたが、戦国時代の兵火で焼失する。江戸時代黒田藩主によって再建されたという。その後のことはわからないが、目の前の本堂は新しい。

（ネットで調べると、一九六四年再建とある）小さなお稲荷様の横を通って、正面の石門から入る。表示板には「新羅式石門」と書かれ、「一人の修行僧が精魂こめて造ったもので、本来三層の屋根が二層になっているのは、建造中力尽きその結果の作といわれています」と書かれている。建立されたのは明治二三年というから比較的新しいものであるが、大人一人が通る石門には苔や蔦が絡



み、これこそ寺が創建された奈良時代に造られた門のように思える。本堂の扉は開かれ、何人か蠟燭を燃やしたり線香を焚いているので、同じようにしてお参りをする。この「観音様」は月に一度ご開帳の日があり、説法があるという。ちようど今日がご開帳の日らしく、説法の時間に合わせて人が少しずつ集まってくる。

巖かに秘仏開帳初時雨  
 開帳の秘仏に集う落葉道  
 観音堂小さし落葉の積む奥に  
 少しだけ厨子開かれし冬の寺

聖子  
 由紀子  
 光子  
 節子

時折晴れ間も見えていたが、急に雨がパラパラと降ってくる。節子さんがすぐに車から傘を持って来てくれる。傘をさしながら、十六羅漢の配置されている庭を歩く。雨の中の羅漢の赤い布が際立つ。石段を下りこじんまりした庭を回る。よく見ると石楠花の花が二つ三つと咲いている。

ただ過ぎてゆく日の中に帰り花  
 帰り咲く石楠花紅の色濃くて  
 時雨来る十六羅漢赤き布  
 時雨るるや山の羅漢の赤き布

節子  
 聖子  
 由紀子  
 光子

脇に鳥居があり、鳥居の前で一人の女性がお参りしている。「海神社」と書かれている。石段を登ってお参りしようとする、「女人禁制！」という。現在はあまり厳しくはないので、登ってもいいというが、祝詞をあげながらお参りしている人に背を向けて登っていくのも憚られるので一礼のみで済みます。

時雨せし跡海神の山社

聖子

落葉道これより女人禁制と

節子

時雨つつわだつみ神社禰宜祝詞

光子

観音に瀬音やさしく冬木立

由紀子



庭を一回りして、また石門に戻る。蔦が紅葉して美しい。石門を抜けるとヒノキの大木に覆われた径が下へと続き、側には川が流れている。ヒノキの幹にも苔が青々と生え、まるで聖域のような雰囲気だ。楓紅葉は本来の色よりまだ鮮やかさはないものの、その下を流れる川を覆い、紅葉を落としていく。快晴でも木漏れ日ほどの日差しが

に、先ほどまで降っていた雨に濡れて石や木の幹の苔がさらに色濃くなっている。感嘆の声をあげながら坂道をおりていくと、小さな山門がある。石門から山門まで、距離にすれば七〇〜八〇メートルくらいの参道だが、「洗心の森」（住職言）の趣だ。山門の入口に「自刃の碑」の表示板と矢印がある。時雨後の山に「自刃の



碑」をみるのは寂しすぎる。そろそろ説法の始まる時間になるが、昼食の予約の時間があるので山門を後にする。

参道のみどりや時雨後

光子

時雨るるや自刃の碑ある登り口

由紀子



車で少しいくと、フレンチレストラン「MORI」がある。ここもまた市街一望の場所で、夜景の美しいレストランとしてよく知られたお店だ。ガーデンウエディングもできるようで、芝生に白い椅子が置かれている。入口の花梨の木が実をたくさんつけ、その奥には山茶花の白い花がぽつぽつと咲いている。薔はびっくりするくらいたくさんついている。店の中は全面総ガラス張りでの景色がよく見える。市街や博多湾を見ながらのフランス料理のランチは女性客に人気のように、次第にお店は満席になる。

時雨たる後の鳥影篇平に

聖子

山茶花の薔の数のただならず

聖子

前菜の皿に紅葉の一枝を

由紀子

昼食後、春日市の「サンマルク」で句会予定。景色にも食事にも満足しながら車に乗り込む。福岡市南区の道を聖子さんナビで確認しながら、大野城や春日に抜ける道へと戻る。このあたりは大宰府が近くにあるので、どこを走っても歴史的なものがありそうだ。

間違つてをらぬこの径柿たわわ

節子

「サンマルク」に着いた頃にまた雲行きがあやしくなり、雨が少し落ちてくる。小走りにお店の中に入ると、広い店内には句会を邪魔されず、また邪魔せぬ程の客がいる。窓際の席にすわり、広い春日公園の黄葉した並木をみながら句作、句会をする。今月の兼題「時雨」「落葉」にぴったりの吟行となつたことに感謝！！

ここからすぐ近くに聖子さんのご自宅があるらしいが、快速の停まる大野城駅まで一緒に見送ってくれる。解散。



油山観音「正覚寺」

# 第十五回吟行記

平成十七年 十二月八日(木)

参加者 聖子 節子 由紀子

## 天拝山・二日市温泉

この一年、月一回の吟行句会を休むことなく続け、十句の出句が当たり前になった「あしや句会」の締めくくりの吟行は、学問の神道真公ゆかりの「天拝山」と虚子三代句碑の宿で有名な「玉泉館」。温泉に入ってゆつくり吟行を楽しんだ一年を振り返る予定だ。十二月に入って近年になく寒い日が続き、この日も冬雲のおおう空の下、大野城駅に降り立つ。駅前の木々はすっかり



葉を落とし、工事の音が駅構内の放送と混ざり合う。笑顔の節子さん、聖子さんの車に迎えられ、そのまま筑紫野市・二日市温泉・天拝山へと向かう。大野城市・太宰府市・筑紫野市の三市が隣り合うこの辺りは、古く万葉の時代から開けた所で史跡巡りに事欠かない。大宰府政庁跡(都府楼)の南西側に位置する天拝山(二五七m)は、反逆罪で流された道真公が無実を訴えるために上った山。その麓に建つ武蔵寺(ぶそうじ)にまず立ち寄る。

山寺は残る紅葉のある辺り

節子

現在、正式には天台宗椿花山武蔵寺(ちんかざんぶそうじ)と言う。創建は定かではないが、奈良時代の豪族で二日市温泉を発見した藤原登羅磨(とらまろ)が建てたとされ、御本尊は椿樹の一本彫りの薬師如来像。九州最古

の寺である。木々に囲まれた寺は決して大きくはないが、風格を備えたたたずまいだ。檜や楓の木を見上げながら山門から境内に入ると、橋のかかった小さな池がある。池の隅には庵があり、そばに青鷺が一羽置物のように立っている。

鶯一羽動かざる池末枯るる

由紀子

冬池の青鷺突如飛び立てり

聖子

本殿へと奥に進むと、みごとな藤棚があり、その下に藤の落葉がふかふかに積もっている。「長者の藤」と名付けられたこの藤の木は、筑紫野市の天然記念物に指定されている。藤原登羅磨が自分の姓にちなみ「塔堂の盛衰は、この藤の盛衰にあらん」と誓って植えたといえられている。樹齢一三〇〇年の藤は毎年きれいな花を咲かせ、武蔵寺は「花の寺」として有名になっている。本殿に線香と蠟燭をお供えしお参りする。大きな念珠が下がり、ゆつくりとまわす。



ゆつくりと大念珠引く冬の寺

節子

本殿脇の羅漢を通り過ぎ、降り積む落葉の石段を上りつめると古い鳥居がある。鳥居をくぐると小さな社があり、その前を初老の男が一人落葉を箒で掻き集めている。山の落葉は集めても集めてもあらかし、落

葉の山がいくつもできている。社の説明書きには「御自作天満宮」(ごじさくてんまんぐう)とある。石段を下りていくと注連縄が張られた岩がある。奥に二、三メートル程の滝があり、「紫藤(しとう)の瀧」「衣掛岩」の案内板。皆道真公ゆかりの場所だ。

石畳さらに埋めて散落葉

堆く集む落葉にまた散りて



節子

由紀子

道真公が大宰府に左遷されたのは九〇一年。「遠の朝廷」と呼ばれ「筑紫歌壇」の栄えた大友旅人らの時代から百年過ぎた大宰府は、都人の道真公には耐えがたき場所。悲運の中に生涯を終えるが、無実を天に訴えるために向かったのが武蔵寺であり天拝山である。百余日間境内の「紫藤の瀧」に打たれて身を清め、山頂に登って七日七夜岩の上に爪立って祈り続けたところ、天から「天満自在天神」と書かれた尊号を受け取り、ようやく願いが成就されたという。天を仰ぎ、天の神に祈っている姿は十三世紀の「北野天神縁起絵巻」が伝えている。「御自作天満宮」は、道真公



が武蔵寺に参詣された時、自分の像を刻んで納めたと伝えられ、それがご神体になっている。山の木々に囲まれた小さなこの天満宮は、「天神さま」と親しまれて多くの人が参拝する太宰府天満宮とは全く趣きを異として、ただ落葉がはらはらと散る中にひっそりと建っている。

栄えたる筑紫歌壇や落葉径

由紀子

「紫藤の瀧」のそばから始まる天拝山への上り径は、「天神さまの径」と名付けられ、頂上までの道しるべとして十一箇所道真公の詠まれた歌碑が建てられている。起点の歌碑には「東風吹かば匂いおこせよ梅の花・・・」が刻まれている。今回この径は登らず、なだらかな坂道を登って「万葉植物園」へと向かう。草木五三種、木本六四種が植えられているそうで、それぞれの草木には万葉名の名札がつけられている。また花にちなんだ万葉歌が添えられているものもある。枯れたものが多い冬の植物園だが冬は冬の趣きで散策を楽しむ。

柿ノ木と名札を付けて実のたわわ

聖子



植物園を一回りして池のほとりへと下りてくる。万葉植物園を含めて、このあたりは「天拝山歴史自然公園」として平成六年に整備されている。十年ほど前に建った新しい建物ではあるが、目の前の水上ステージや藤原登羅磨像のモニュメントは、古く歴史のある天拝山麓ならではの重みを感じさせる。大きな水上ステージでは、観月会など催されているという。広々とした公園から見る月はさぞ美しいだろう。天拝山の自然にどっぷり浸りながらの吟行中、よく見かけるのが猫。猫も自然にどっぷりなのか、目の前を悠然と歩いていく。

照りかけるさざなみに浮き冬紅葉

由紀子

猫ばかり丸々たる冬の寺

聖子



昼食と温泉は「玉泉館」。同じ二日市温泉の宿「大丸別荘」ほどの大きさや庭の広さはないが「虚子三代の句碑の宿」ということで、一度はいつてみたいと思っていた宿だ。天拝山から車ですぐのところで温泉街の中にある。

「宿のパンフレットより」

更衣したる筑紫の旅の宿

高濱虚子

虚子の句日記 「昭和三十年五月十四日 飛行機 板付着 福岡県二日市温泉 玉泉館。昭和六十年七月「万燈」主宰江口竹亭氏により高濱年尾 稲畑汀子両先生の句碑を建立。滋に「ホトトギス」御父子三代「宿」の句碑が相並び小館の誇りであります。」



虚子の句碑は、玄関横の松と竹を配した中に小さくある。御影石二本の句碑は、「句碑の宿」と知らなければ通り過ぎてしまいそうだ。宿の中はほの暗く、広い土



間には手焙りが用意され、下駄がきれいに並べられている。坪庭には苔生す石と楓の木、中庭には松や梅の古木が配されている。中庭のほぼ中央に大きな句碑が建ち、二句並んで書かれている。

《温泉の宿の朝日の軒に照紅葉》

年尾《》

《梅の宿惚ぶ心のある限り》

汀子《》

惜しいことに、この宿に実際泊まって作った句なのかどうか聞かなかった。宿の廊下には色紙に書かれた年尾句が額に入って飾られている。広い部屋からは日本庭園を楽しむことができ、懐石料理も美味しい。満了したところで温泉へ。「男湯と女湯の入口は違いますが、中でつながっています。今男性は誰もいないから気にしないで下さい。」と仲居さんが言う。女湯から入ると湯気の向こうに先ほどの庭園が広がっていて、お湯は肌にしっとりして気持ちがいい。ちょっとした間仕切りがあり、確かに男湯とつながっている。女湯と男湯の割合が三対七ぐらい。女湯に三人入ればいっぱいになる広さだから男湯に回る。目にも肌にも贅沢な気分になさせてくれるお風呂だが、泊まり客は混浴にしては狭い湯船にゆっくりできるのだろうか、軽い心配を覚えながらお湯をでる。

冬の宿虚子三代の句碑の庭

節子

チェックアウトの時間がきたので「玉泉館」をあとにする。車でしばらく走り「ロイヤルホスト」にて句会。あの山が四王寺山、向こうの山が宝満山。自然と歴史にあふれる筑紫路に住む節子さん、聖子さんの環境の良さを再確認した一日となる。遅くまで付き合ってくれてありがとう。今回光子さんは、弔事のため急遽欠席となる。また吟行しましょう。とても良い吟行地です。



あとがき

平成十六年当時、家庭内のパソコン環境は少しづつ充実を図れ、我家の長男が簡単なホームページを作り、仲間内で情報交換をしており、さすがに若いと利用分野への適応能力は高いなど他人事に関心事でした。

一方、「あしや句会」の月に一度の吟行活動が定着化するにつれ、筆者から「あしや句会」ホームページの作成と、吟行地の記録としての「吟行記」を掲載してみたいとの申し入れがあり、我家のIT環境管理者を自認する家人としての意地もあり、長男に負けず、ホームページ作成にとりあえず挑戦することとなりました。

ホームページ掲載の内容は、「吟行記」だけでは寂しいので、「名句鑑賞」「自薦句」吟行地の写真集「ギャラリー」と相互簡易連絡用の「掲示板」を設けた構成でスタートすることとなりました。

閲覧されるみなさんに来るだけ季節を感じて戴けるようなアイテムや、閲覧し易いよう、多少の工夫も試みてみましたが、家人にとっての一番の収穫はホームページ作成知識の向上とスキルアップ、更には土日の空き時間を十分満たして戴きました。

今回、平成十六年十月～平成十七年十二月までの十五回の吟行記を冊子にまとめ、記録（むしろ記念の意の方が強い？）として残しておこうとの筆者の要請に基づき、これまでの十五回の吟行記掲載分を冊子用に再構成いたしました。

今後とも「あしや句会」の吟行が、相互啓蒙と懇親の場として末永く続く事を祈念いたします。

ホームページ担当の家人

響 風—Hibiki Winds—

あしや句会 第1号

平成18年2月発行

発行人：江本 由紀子